丁「一體普通の人が、神樣と乎佛樣と乎に對する概念はどう云ふものなんだらう。」

乙「人に依つて色々異つた考を持つて居る事當然だが、要するに、萬知萬能で、之に願へばどんな事でも叶へて呉れる、人力を超越した力ある者と云ふ事に歸着するらしい。」

丙「して見ると、御賽錢を上げて御利益を授からうとするのは、畢竟するに、贈賄だね。神や佛は收賄をしても差支なくて、人間だけに收賄罪が成立するの乎。」

三太郎「それは違つて居ます。御賽錢を上げるのは、何も神や佛に上げるのでは無く神社や佛堂の維持者に寄贈するのです。神佛を崇拜すると言つても、何乎形が備つて式がなければ徹底しない、少くとも凡夫に對しては其傾きがある。從て堂宇を建立すると乎、祭典を行ふと乎、乃至は朝晩の供養と乎、色々の事に經費を要する筈です。其經費の一部を負擔する考から、多少の金錢を參詣する際に呈出するのが卽ち御賽錢です。萬一それでなくして、神佛に金錢を提供して御利益を受け樣とする樣な人が有るなら、其人に浮世の世事をさせれば、必らず贈賄罪を犯す人間です。」

丙「盜みをして置いて發見されない樣に、淺草の觀音樣に願を掛けて、其願文を側に聞いて居た角袖の刑事につかまつたと云ふ話が、新聞に出て居つたが、近頃の信者は大概此流儀でせう。」

三太郎「宗敎家の說き方は怪しい點が有るからです。如何なる重罪を犯しても、神佛に賴めば赦してやると說敎する故に、其眞意を誤解するのです。」

甲「壹萬圓も盜んで、其內から千圓程の鳥居でも奉納して、罪が許されるなら、九千圓は丸もうけに成る勘定だね。」

乙「それでは、丸て神樣は泥棒の親方の樣になるでない乎。」

丙「政府の事業を引受けて、千萬圓も誤魔化して、其內から百萬圓も寄附すれば、罪が許される計りでなく、華族樣になれる乎も知れんよ。」

丁「神樣だつて元は人間の思想から割出したのですから、大差はないでせう。罪人

が典獄や監守に御賽錢を上げれば、大概の事は大目に見て呉れると云ふ樣な事實から、平生罪の深い事をする人が、多く神參りするのです。」

賽之河原に來て見れば、例に依て小石が其處にも此所にも積み重ねられ、赤や白の花菓子が供へられれて居る。子供を失つた婦人の手に成る爲乎、何れも小さな石ばかりて、一尺五寸の高さが最大限である。後から來た青年は平氣て供養の菓子を喰べて行く。正面には地藏堂があるのみて、格別に記するに足る者もない、右の方遙に見ゆるが劍の山て、此附近一帶を徘徊する婦人は時々變な聲て泣く。此所て泣けば死んだ人に逢はれると云ふのてある。一人の婦人は十分間程泣いて居つたが、竟に諦めが付いたと見えて、

婦人「幾ら泣いても、どうせ逢はれないから、ボコ〳〵ても見て行かう。」

と言ひながら、元の晴れ〴〵した顏になつて、硫化水素の盛に噴出する池の水面を眺めながら、去つて仕舞つた。賽之河原から左に往けば、血之池地獄がある。小さい池の中に、女人成佛血盆經と書いた紙が幾つとなく投げ入れられて居る。新しいのは浮いて居るが、古いのは沈んて居る事云ふ迄も無い。此經紙を投じて沈む人は浮ばれない筈てあるが、新しい內は誰が投げた紙も浮く故に、婦人連は安心して歸つて行く。血之池と云ふから酸化鐵が眞赤になつて居るかと思つて來たら、普通の溜水で溫度は攝氏三十二度、分析して見ると酸性て、硫黃、硅酸、鹽素等　含む事は附近の溫泉と大同小異て、格別多量の鐵分を含んて居らぬ。唯幾百年以來投げ入れた血經の紙が水底に腐敗して居る結果、有機物が非常に多いのは當然てある。

丙「是が血之池乎、少しも理由がわからんですね。」

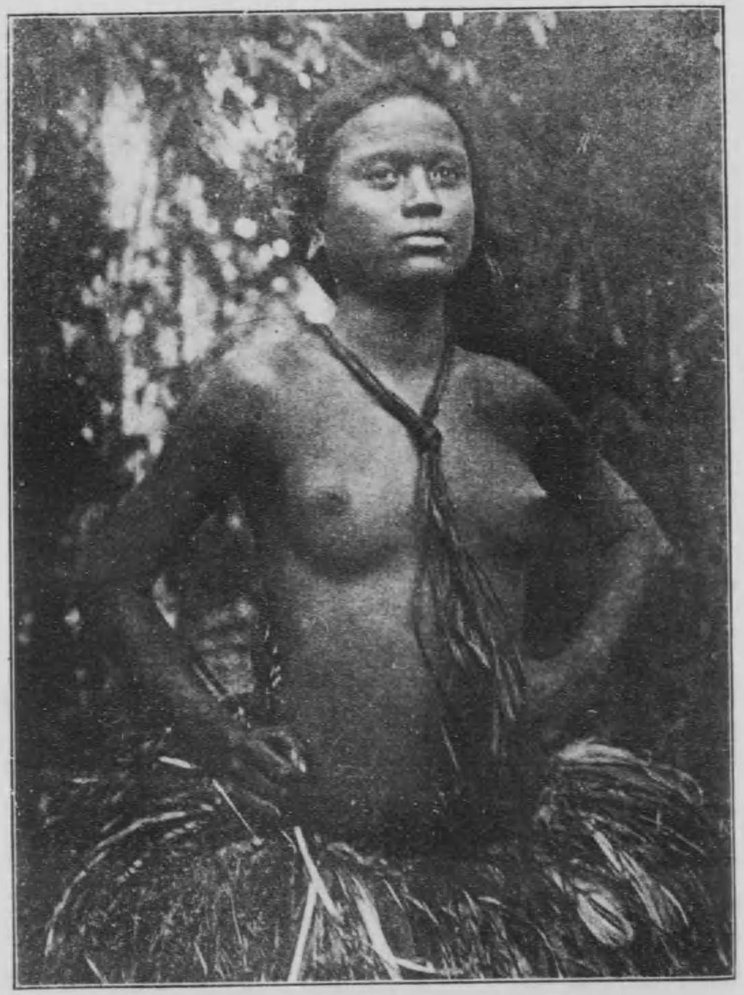
甲「血盆經てどんな御經てす乎。」

三太郎「佛說大藏正敎に依ると、嘗て日蓮尊者が鳥州追陽縣に旅行した時に、一個の血盆池に於て、鐵梁、鐵柱、鐵枷、鐵掌等の設備ありて、幾多の婦人が獄卒に責めて居らるゝのを見た。其處で理由を聞いて見ると、女性の者は成人すれば、每月

の經水や產後の汚物を以て河水を汚して平氣で居る。然るに諸の善男女は知らず知らず此不淨の水を取りて諸聖に供養する。從て婦人の罪は重大である故に、血之池地獄に墜落するのであると說明して有ります。つまり、月に三日の不淨水を疎雜にする婦人が血之池に墜ると言うて、婦人を誡めた經文です。」

五九郎「私が南洋の新占領地に旅行した際に、トルック島は珊瑚島で河水に缺乏して居るが、僅の水溜に婦人が每日幾回となく浴して不淨を洗ふ習慣がある。然るに島人は平氣で此水を料理に使用して居るのを見て、あきれました。恐らく古代の印度も同樣で有つた乎と思はれます。」

三太郎「衞生思想の乏しい人間は、不潔の何たるを解しない故に、之を敎化するのが容易でない。月經の始末を疎略にせず、常に自己を淸潔に保つのみならず、他人に迷惑を及ぼさゞらしむるには、血之池地獄の說が最良の方便である。けれどもユモジを平氣で風呂の中に洗濯する如き斗南半島の婦人は、假令每日血盆經を池中に



南洋の婦人　第三六圖（三四八頁參照）

投げ入れても、血之池地獄から免がれ得る筈がない。」

甲「それでは、血之池と云ふのは、つまり其血盆經に書いて有る事を説教して、婦人に注意を促すべきものなんですね。」

三太郎「勿論左様です。恐山の僧侶のみならず、凡ての僧侶が、單に血盆經を池中に投ずる如き兒戯を止めて、須らく獄主が日連尊者に答へた趣意を體し、衞生思想の普及を計らん事を希望するのです。」

五九郎「願くは此功德を以て普ねく諸の女人に施し、同じく血盆池を出で、往いて安樂國に生れん事を喝と言ふ所ですね。」

丁「聞いて見ると、血之池の説も相當の理由があるですね。」

三太郎「無論正當な事です。唯後世の僧俗が形式だけを保存して、印刷した血盆經を池中に投じて、それで極樂に行けると信じて居るから、迷信と言はざるを得なくなるのさ。」

三十五　極樂濱

賽之河原附近に行けば死んだ子供に逢ふ事が出來、先祖の聲を聞く事もあると云ふ噂であつたが、番僧の話に依ると、夫は滅多にない事て、二三年前に山奥に往つて其聲を聞いた人が、竟に病氣に成つて死んださうてある。成る程死ぬ人や發狂する人などには、得てさう云ふ事が有り勝ちである。

甲「私は昨日あの邊に行つたら、オエ〳〵と泣く樣な聲が聞えたよ。あれは烏てあるまい乎」

乙「あんな風になく烏は居るまい、山鳩ならばテテーポッポとなくし、時鳥ならばカッコーと鳴くからな。」

丙「山鳩がポッポと鳴くのても、始めから氣味わるがつて居れば、死んだ人の聲に聞えるかも知れんよ。」

五九郎「一寸靜かにしたまへ。何乎聞えるよ、實際變な音だね。」

血之池地獄から賽之河原の地藏堂を經て、音〻便りに山の方に近くと、不思議な聲がきこえなくなつた。右に曲つて更に劍之山の方に進んて行くと、左手に二人の婦人が立ち居り、右手の方には三人の婦人が話をして居る。暫くすると再び泣き聲が聞えた。何の事はなし、左手に居る婦人が泣くのてある。右手の方に行つて三人連の婦人に、あの女がなぜ泣いて居るの乎と聞いて見たら、死んだ亭主に逢ひたいつて泣いて居るので隨分馬鹿だよと笑つて居た。此所に來て泣けば　死んだ人に逢はれると信じ、泣いて〳〵竟に發狂して仕舞つた者もあると云ふ話てある。更に歩を轉じて湖岸に赴いた。極樂濱の名に背かぬ佳景てある。朝比奈岳は鏡の如き水面に倒立し、濱邊は到る所に瓦斯が噴出し、礦泉が湧き、五色に色取られて居る。汀に沿うて北に進んだ。

丁「こんな砂ばかりの濱に、葭が一株ある。」

五九郎「夫は流れて來たのだ。浮島です。此湖水に浮島が有ると言ふ話は聞かないが、是は慥に浮島です。」

學生が膝の深さまで湖水に入り、葭の株を突き出すと立派な浮島になつた。

乙「此所には何乎蟲が澤山居る。」

丙「皆死んだ者ばかりだ。是はアケヅだね。」

甲「トンボの幼蟲でせう。」

五九郎「トンボの幼蟲の事を東北地方ではアケヅと云ふのです。大和詞でアキッと言ふのから轉訛したのさ。日本をアキッ島と云ふのも、此蟲が澤山居るからです。日本の地形がトンボの飛んで居る形に似て居るからだなど、地理の先生が說明するのは出駄良目です。太古時代に地形など知れる筈がありません。今の浮島に生えて居た樣な葭が到る處に密生し、玆に居る樣なアキッが全盛を極めて居つた故に、トヨアシハラと乎、トヨアキッシマなど云ふ名が出來たのです。トヨは豐で澤山あると意

極樂濱に漂著せる浮島　第三七圖（三五二頁參照）

三途の川　第三八圖（三五七頁參照）

味ですから。」

丁「ヨシが澤山あるから、トヨアシハラと名を附けたと云ふのは、理屈が合はんでありません乎。」

三太郎「浪花津の善しや惡しやはいざ知らずと言ふ事があるでせう。アシと云ふのが初の名だが、アシは惡しで緣喜がよくないから、反對にヨシと言つたのさ。丁度梨は無しと同音だから、反對にアリノミと言ふ樣なものです。」

乙「東北や北海道は、今でも太古の儘で、こんな物が繁殖して居るのですね。」

三太郎「夫だから何時かも言つた樣に、時間と空間とは孤立して居ないと言ふのです。未開地に行けば、何千年も以前に時間を逆行させたと同じ現象が見られるのです。」

甲「此所にだけこんなに澤山蟲が集まつて居るのは變んですね。」

丙「熱湯の樣に此所が熱いので、知らずに來た蟲が死んで仕舞ひ、長い間腐らずに

居るから、段々多くなるものらしい。」

丁「極樂濱で往生安樂國と言ふ所だね。」

五九郎「此所の水は表面は非常に熱く、攝氏七十度もあるに、僅か一寸乎二寸下では普通の冷水だ。是では蟲が知らずに來るのも無理はあるまい。」

丁「なぜ表面だけがそんなに熱いのでせう。」

五九郎「丁度此水面に接觸して居る汀から、少しづゝ熱い瓦斯が吹き出て居るのです。暖かい水は輕いから沈まず、且つ水熱の不導體であるから、熱は下の方に傳はらないのです。若し熱が水底から加はれば、こんな事にはなりますまい。其所には木の葉が澤山あるが、渡金した樣に變な色になつて居る。多分硅酸を多く含んだ溫泉が此汀が湧出して居るので、此蟲や木の葉が此儘化石になるのかも知れない。」

乙「此所に木の葉の化石があります。立派に出來上つた化石です。」

丁「化石と言ふのは、大昔前世紀に居つた動植物から出來る物と思つて居たら、極樂濱では化石の速製をやつて居るんだね。」

甲「是は化石と言ふよりも、木の葉が鑄型に成つて出來た鑄物でない乎ね。」

五九郎「さう云ふ物でも、地質學者は矢張化石と云ふのです。兎に角標本として採集しませう。」

其内に日は既に沒したから歸途に就き、大聲を發して浩然の氣を養ふと、非常に立派な反響が來た。其時間は約三分之二秒である。次第に血之池の方に進めば其時間は當然短縮するが、賽之河原で聲を出すと、地藏堂の後の山と、劍之山とから二回の反響が聞える。泣き聲を出して見ると、森林の奥底で悲しい泣聲が聞える。森林の樹木の爲に音波が亂反射や廻折現象を生ずる爲乎、反響と原音とは著しく其音調を異にする。先刻聞いた疑問の音は、明に劍之山の麓で泣いて居つた婦人の聲が山で反射して、吾人の耳に達したのである。翌朝再び試驗して見ると、夕方とは多大の差がある、世間の騷々しいのや、日光直射に依て森林の内外に於ける溫度の急變

に基くらしい。然るに、此所は大港要港部から一萬米以内に有るので、地形點を測量撮影するの自由がない爲に、更に精細に數量的研究を發表する事を得ぬ。

甲「恐山の位置は、北緯四十一度十八分、海面上六百八十餘尺と云ふ北國の山間で且つ四周の山峯には樹木森々として繁り、大盡澤小盡澤を始め四十八澤の稱ある細流が其内側に浴うて流れて居ると言ふから、氣溫冷涼にて避暑地に適當した場所乎と豫想して來たのに、丸で案外だね。室内で華氏九十度と言へば、東京や大阪と變りはありますまい。」

西「何と言つても大焦熱地獄があるのですからね。要するに我等は今地獄之釜の中に居るのでせう。」

三太郎「けれども、かうやつて恐山湖の汀を徘徊して居れば、暑さなどは全く忘れて仕舞ふでない乎。實際良い景色でせう。」

豫定の日數を經過したので歸途に就いた。一行六人再び三途之川を渡りて娑婆世界に戻り、坂を昇り坂を降り、急いだけれども、炎熱甚しき爲話程には足が進まぬ。

五九郎「是まで南船北馬可なり旅行したが、同行者の内に落伍する者を生じたのは、今度が初めですね。」

乙「恐山の祟りでせう。」

三太郎「恐山の祟りなら、發頭人が第一に病氣に成る筈でありません乎。學生に何の罪もありますまい。」

西「恐山の神樣乎佛樣か知らんが、一寸遠慮したのでせう。」

五九郎「すると、神や佛と言ふ者は、丁度何時乎、中將に怨が有つても報ゆる事が出來ずに、其令息たる小學校生徒を殺した、陸軍大尉と同樣のもの乎ね。」

甲「まさか、神佛と腐れ切つた軍人とを同一視しては、不敬であるまい乎。」

五九郎「日本の神樣は、大概軍人でありません乎。」

三太郎「野蠻時代や半開時代には、軍人以外に偉人と言ふ者を認めないものです。軍

人以外の人物が神樣として崇拜せられる樣に成らねば眞の文明國ではありません。」

乙「崇りて無いとすると、落伍者は二人とも北海道は熊の住む釧路北見の山野を、五十里も徒歩て蹈破したと自慢する猛者ですから、不思議ですな。」

三太郎「生兵法は大怪我の元と言ふのは其所の事さ。何の恐山ぐらゐと高をくゝつて不用心をしたから、胃腸を損じたのさ。山神や海神が我々に崇りを成す唯一の手段は、雲を起し、霧を吹き、雷を鼓し、電を點じ、雹を降らし、大雨を濺ぐと言ふ寸法に一定して居るものです。從て氣壓の配置に注意して、天候險惡の兆ある場合には探檢をせぬに限る。普通の人々は天氣が續いた際に旅行を思ひ立つから、出掛けると降られるのが當然です。晴天でも雨天でもそんなに長く續くものでないから、降り續いた際に探檢を目論めば、出掛ける頃には上晴天に成るものです。」

五九郎「聞いて極樂見て地獄と云ふ句が、いろは歌留多にあるが、恐山は全く其反對だね。」

伊豆大島三原山御噴火口

第三十九圖（三五九頁參照）

三太郎「吾人の祖先が神の概念に到達した最初の動機は、天上の熱は人類に生活の要素を與ふるものである故に、愛すべき神として慕はれ、地火と熱は不慮の災害を與へて恐るべき神として敬遠されたので、地下熱の活動烈しき場所は、何所でも地獄と云ふ名が附いて居るのです。然るに、毒と藥とは其名は反對でも、其實は同一物である如く、地獄と極樂も其境界は壁一重で、人を喰ふ鬼が神と祭られ、地獄の根柢をなす地火熱は、直に御神火として崇拜されて居ります。」

甲「左樣言へばさうですね、伊豆の大島には、

わたしや大島御神火そだち
むねに炎が絶えはせぬ

と云ふ俗歌があるが、三原山が噴き出す火を御神火と言つて居るのですね。」

乙「恐山でだつて、年に一度の祭禮に參禮した幾多の若い男女は、むねに炎を點じて歸るではあるまいか。」

丙「それがなければ參詣人があんなに集まる筈はないさ。天理敎などは、獨特の踊りで衆愚を集めるのだと云ふてないか。」

丁「キリスト敎だつて、愛は神聖なりと說き、處女の孕むのは聖靈に感じたのだと言つて、若い男女を媾曳させて居るのでせう。」

五九郎「人根に利鈍あり、毘沙門の身を以て得度すべき者には、卽ち毘沙門の身を現じて爲に說法すべく、比丘尼、優婆塞の身を以て得度すべき者には、卽ち毘丘尼優婆塞の身を現じて說くのが、人を見て法を說くと云ふ注意さ。」

甲「それでは飮酒家が來たら、先づ酒を飮ませてから說法するんです乎。さうすると、葷酒山門を入るを許さずなど、制札を立つる必要はない筈ですね。」

丁「あれは、許さゞれども葷酒は山門に入ると讀んださうだが、勝手に這入つて來るのは仕方があるまい。」

丙「今泣いた烏がもう笑つたと言ふ事があるが、八萬地獄で聲を枯らして泣いた婦人が、本堂の前に戻れば、平氣で盆踊をやつて居るのには驚くね。」

三太郎「夫が恐山の有難い所さ。人間に諦めを附けさせるのが佛敎の目的なので、あれだけ浮世を悟つて仕舞へば、成佛した者と言へる乎も知れん。」

五九郎「一日の內に弔すれば慶せずなど言ふのは、孔孟の頑迷連ばかり乎な。」

甲「近頃の世の中は急がしいですからな。葬式に行つた序に、歸りには芝居を見てくる位の事をしなければ、暇が得られないでせう。」

三太郎「其點から言へば、恐山などは完備したものです。一から十まで揃つて居ますから、人類が母の體內に宿る事から、子孫に菩提を弔はるゝ事まで、人生の行事が缺くる所なく恐山の境內で出來るので、全く人生のデパートメントストーアです。」

五九郎「恐山は、山形縣の山寺にある立石寺にて入滅せる玆覺大師の開山で、出羽の三山にて四十餘年間修行した智瀧阿寂梨の中興と言ふ話であつたが、弘法大師が開いた湯殿山と、此恐山とを比較すると、同じく溫泉湧出の場所でも、參詣者の種

類は雲泥の相違ですね。」

歸途には大湊から船に乘り、青森灣を横斷して青森港に上陸した。

三十六　神輿荒れ

青森から再び汽車に乘つたが夕陽は窓からさし込んで遠慮なく照らすので、成るべく反對の側に片寄つて窓外を眺めて居る乘客が多い。

乙「此町にも何乎の祭禮があるね。」

乘客「あれはネブタです。盆の飾物で、七夕祭の一種です。」

丙「何の事です乎。ネブタと言ふのは。」

五九郎「私の國にはネムタナガシと言つてね、七夕祭に使用した竹を七日の早朝未明に河に流します。早い程良いので、村の者は此日に早起の競爭をし、河に行つて水泳をします。睡眠欲を此日に流すと言ふのです。」

第四〇圖　ネブタの一部（照參頁三六三）

三太郎「夏は兎角夕涼をするので朝寢の習慣が付きます。夫で秋の初に際して其習慣を改め、再び秋の活動を始める爲に、朝寢を河に流すと云ふ流儀で、ネムタナガシと言つたのでせうが、それが此地方でネブタと變化したに相違ありますまい。」

丙「あの人形が睡眠の神樣です乎。」

五九郎「それはネムタと言ふ儀式を、後世練武と關係附けてあんなものにしたのでせう。例へば日本で蟲送りや風送りなど言つて、藁人形を村外れに持ち出し燃やす所があるが、西洋では之をユダ之燒打と言つて居る。耶蘇教國だから惡い者にユダと云ふ名を附けたので、同一の事でも、民族や時代の趣好に應じて、種々に變形するのは當然です。恐山でも話した通り、盆火などは世界の各民族を調べて見ると、丸で想像もつかぬ程に違つた形式で實行されて居りますからね。」

乘客「西洋にも盆火があります乎。」

五九郎「有りますとも、其事ならば火及火災と言ふ著書の第二版に、火と祭禮と言

ふ題て、精細に說明したのがありますが、ノルエー國のベルゲン地方に行きますと野や山に盆火を燃やすばかりでなく、筏の上に火を燃やして峽谷に流しますので、海も山も一面の火で、松島の燈籠流しなどと較べ物になりません。」

丙「今の話で思ひ出したが、松島で燈籠流しを見物し、夫から神輿騷動で有名な、鹽釜神社に參詣し樣で有りません乎。」

丁「一體あれはどうなんです乎。新聞に書いたのを見ると、八十貫乃至二百貫もある重い物を、四十餘人の輿丁が、無言のまゝで采領もなく勝手にかつぎ廻るのだから、往來の兩側に衝突する位は當然で、神意と乎奇跡など言ふものでないが、去りとて衝き當てるのは輿丁の故意と認める事が出來んと云ふ樣な噺でしたが。」

五九郎「それは勿論さうでせうさ。物理學上の方面から論ずれば、物體は何時でも力の働いた方向に動くものではなく、それは單に一つの力が靜止して居る物體の重心に働いた時だけですもの。二つ以上の力が同時に働けば、其合力の方向に動くから、何れの力の方向とも一致せず、殊に重心を外れて働けば、獨りでに物體が廻轉するのです。例へば輿丁が足並揃へて前進して居れば、神輿は其重量と速度との積にて測定される運動量を持ち、此運動量が有る間は、輿丁が止まらんとしても神輿は前進を續けます。其處で萬一前の輿丁と後の輿丁とを結んだ線、卽ち神輿の舁棒（かきぼう）が道路に傾いて居る際に、前の輿丁が辻などで急に步調を緩めると、神輿は元の速度で前進を續けるから、廻轉性を帶ぶる事になります。此時に後の輿丁が踏み堪へれば無事に神輿が止まるけれども、神輿の爲に前に引かれた際に、迷信家たる輿丁は、是を神の意志を直觀して、引かるゝ儘に前進するから、神輿は廻轉を續ける事になります。」

乘客「人がかづいたのなら、其神輿がどんな風に動いても、矢張人が動かしたのでありません乎。私は東京朝日新聞で拜見したが、柳田國男と言ふ方が、博士の說に反對して長く論じて有りましたよ。」

五九郎「日本語には、英語の様に、エーと乎ザーと乎云ふ冠詞がないから、能く誤解をするのです。博士の言つたのは、甲と乎、乙と乎云ふ特定の輿丁の意志に基いて衝突したり、廻轉したりするものでないとの事です。力は無論輿丁が出したので、別に人間以外の力が加はる筈がありません。但し茲に注意すべき事は、力の効果には二種類ありまして、一つは一時的であるが、他は永續的であると云ふ事です。一時的の効果と言ふのは加速度で、永續的とは速度です。換言すれば、加速度は力の働いて居る間だけ生ずるが、速度は力が働かなくなつても無くなりません。從て現に物體が或速度で運動したからと言つても、夫が其時に加へられた力に基くのではありません。既に止めて仕舞つた輿丁が先に加へた力まで、預つて居ります。」

甲「私は帆手祭の日に行つて見たが、柳田が新聞に書いて居る樣に警察の門内に神輿が亂入したなど云ふ事實は無いので、唯門の右側にある柵に突き當つた丈です。警察の前は片側が入海で、其岸に見物人が一杯に立ち、警察の側には一人も居ないから、神輿が柵際に近く通つたのは自然の順序で、夫が前の輿丁の歩調が後の輿丁のより少し遲れた爲に、五九郎さんの御説の通り、神輿が廻轉性を帶び、棒鼻が厲れかゝつた木柵に衝突して破損したので、別に珍らしい事でも何でもないのです。」

三太郎「大問題に成つた本當の衝突は、其の後にあるので、精神的のものです。物質的の衝突は今の通り簡單なものです。つまり、輿丁連や氏子一同は神の意志をかつぎ出し、警察官は法律を笠に着ての衝突だから、双方共に各自の立場から見れば正當なので、泥醉者と狂人とが衝突した樣なものです。從て其正否などを論ずるのは馬鹿の仕事です。」

五九郎「理學者は事の正否を判斷するのでなく、如何なる法則に從ひ、どんな順序で事象が起る乎を明かにするのです。今度の問題でも、博士の研究は、衝突したのは何時如何なる力がどう云ふ工合に加はつて起きたのであるかと言ふ方面にあるのです。其結果として、衝突させようとして故意に其方に力を加へたので無いと判定

したのです。夫を柳田が、凡ての神輿荒は絶對に故意で無いと言つた乎の如き口調て攻撃するのは無理です。昨夜隣家の燒けたのは放火てないと言つた所て、世の中に放火罪が無いと云ふ議論をするのではありませんからね。」

甲「場合に依ては惡意でやる事も無論ありませう。消防夫が演習をだしにして、人の室内に筒先を向けたり、或は祭禮に寄附が少ないからと言つて、あばれ込む事などは珍らしくないてせう。」

乘客「鹽釜には昔から公怨を漏らす神事があつて、町内の子供が人の背戸門の邊に來り、其家の者を罵倒する風が有つたと言ふてはありません乎。」

五九郎「あのザットナと乎云ふ古事てす乎。あんな事は何も鹽釜神社に關係のない事て、何所にもある事です。柳田と云ふ人は、學校て敎はつた國文學や歷史を金科玉條として居るから、風土記などを引合に出すの乎も知れんが、三太郎さんが口ぐせに言はるゝ通り、時間と空間とは孤立して居ないから、風土記時代の歷史的の風俗だつて、東北の田舍だつて今日猶現在に殘つて居ります。私の國では、正月の十三日の夕から十四日の朝にかけて、鳥追と云ふ儀式がある。村の子供等が出掛けて害鳥を追拂ふまねをするのであるが、人の門口に行つて罵倒するのがなか〳〵面白いものです。」

丙「どんな事を云ふのです乎。やはりザットナと始めるのです乎。」

五九郎「左樣ではありません。文句は思ひ附き次第だから千變萬化するが、形式は同一て例へば、

國雄さんだは〳〵、おやぢなへんのご、たーちにしよつて、にんぜんかあけ、
さんぜんかあけ、動けーね、うごけーね、じやー、ほほー

と言つて拍子木をたゝき、鳥を追ふまねをするのです。」

乘客「面白さうだが、吾々には何を言つて居るのか、少しも了解出來んてすな。」

五九郎「今のはつまり、人間には家庭の感化と言ふものが強い影響を持つのて、い

くら新教育を受けた人でも、親父の思想を受け繼ぐ爲に、神官の子は何所までも神官臭く、動きが取れないと言ふ樣な意味です。是なども無論昔の儘ではなく、形式の上では多大の變化を受けて居る筈で、仙臺邊ではザットナとなり、山形邊では鳥追と變化したのでせう。歐米には其同じ儀式が、ユダ追と云ふ名で殘つて居る地方もあります。」

三太郎「それなども初から子供がやつたのではありません。昔は成人が眞面目に行つた事でも、次第に宗教的儀式となり、最後に兒童の遊戯と化するのは一般の法則です。神輿なども既に子供の遊び事に成りかゝつて居るので、近き將來に於て、樽神輿が本物の神輿を驅逐して仕舞ひます。」

五九郎「動物學上から見た進化論に從へば、人類は如何に進化しても、其進化した人の子は一足飛びに文明人になる事は出來ず、短い間では有るが、兎に角凡ての經歷を順次に進むもので、恰も皇族でも軍隊に入れば、少尉から進むと同樣てあります。從て文明人の子供は野蠻時代の成人と同一狀態にある筈ですから、昔の成人が眞面目に行つた事が、今の子供に丁度適當する筈です。」

三太郎「全く左樣です。其處で子供がマヽゴトをするのを見て居ると、茶を飲むまねをして喜んで居るが「子供には實際に飲んだと同一に感ずるので、本當に滿足して居るのです。此水が辛いぞと言へば、本當に辛いと信じて居ります。それと同一て、此内に御神體があるぞと言へば、昔の人が全くそれを信じたのです。從て信じた事は事實であるが故に、我々も其所に神の存在を認めねばならんと言ふ結論には到着せんです。子供が此水を辛いと信ずるのは事實であつても、我々まて其水を辛いと認める理由は無いてすからね。」

乘客「本當に神が無いものならば、同じ石が輕くなつたり重くなつたりする筈がありますまい。」

五九郎「重い輕いは石などを持ち上げる場合には其重量でなくして、其持ち上げ得

る乎どう乎に在るのです。田舎の村社などに、今でもある力石を見れば直ぐ知れる事ですが、是を粒で持ち上げるには、手のかけ工合が非常に影響するので、同じ人でも是を持ち上げ得る時と否らざる時とを生ずるので、是が卽ち石に靈ありて、重くなつたり輕くなつたりするとの迷信が生じた第一の理由です。萬一是を繩で結び、其繩を持つ事にすれば神異が消えて仕舞ひます。」

乙「そんな理由で、石を祭る樣に成つたのです乎。」

三太郎「石が神として祭られた理由は無論別にあります。第一は火が崇拜された餘波であります。太陽が凡ての神の內の第一位に屬した事は世界の民族に共通であるが、石が火を發生する事實は、火之神が石の內に宿るとの思想を生んだのである。從て石が祭られた最初は燧石である。神事の內で發火の儀式は最も古く、且つ最も神聖視されたもので、日本では出雲の大社に太古からの發火裝置が保存され、西洋では伊太利フロレンスの寺院に、ローマの古代から傳つて居る燧石があり、バッチ家が天國から持ち歸りたるものと信ぜられて居る。次に石は太古の時代に於て永續する唯一の固形材料であつた。今では佛像なども金屬で出來るが、神として崇拜するには一定不變の形體を持續するものでなければならん。其所に石の特性がある。後世に至りて石を祭りたるは、必しも石自身を崇拜したのでなく、吾人の祖先が崇拜した神の形像を有する自然石が祭られたのである。此場合には、石が單に其材料たるに過ぎん。此種の物で最も普通なる物は、生殖器の形を持つて居る自然石である。而して此際には、目に見ゆる御神體は石であるが、祭神は石でなくして、其石が代表する生殖器である。」

丁「御神體が石であるとすれば、之を神輿の中に納めて舁ぐ際に、轉々其位置を變ずる故に、總量は變らんでも、輿丁一人宛に就て言へば、重くなつたり輕くなつたりする筈で、別に不思議は無いですね。」

丙「鹽釜神社の御神體がそんな石です乎。」

五九郎「神輿に出入する時は、神官でも目隠をすると云ふから、誰も見た者は無いので、果して何てある乎知れません。」

丁「何れ見ては惡いものなんでせう。」

三太郎「鹽釜樣は御産之神として最も名を賣つて居る樣ですから、何れ御産に關係があるものでせう。」

乘客「柳田氏の論文の中にも、秩父の横瀨川から出た、夷と大黑との形をした自然石が祭られてあると言つて居ました樣ですね。」

五九郎「秩父は石の名所です。何れ神の形をした自然石が昔から度々流れて來たでせう。神流川と云ふ大きな河があり、鬼石と云ふ町さへ有る位ですから、あの地方は始原時代や太古時代の磐岩が露出して居るので、地質學上有名な場所です。」

三太郎「今の噺て思ひ出したが、夷や大黑でも、元來は陰陽の生殖器の模型に過ぎないです。横瀨川のは勿論の事で大小一對の自然石が祀られて居るのは、大概陰陽の神である。」

乙「石が河中を轉々して流れて居れば、自然に陽物の形になるは別に不思議でないが、陰性の形はどうして出來ませう。」

五九郎「等質の石では出來ないが、火成岩などの中空壁面に、水晶質の物が並んで結晶すると、其裂口は陰性の物に似た形となります。大小一對の自然石が祀られて居る内て、最も歴史的て古いのは、九州筑前國怡土郡深江村子負原にある物で、大なる物は長さ一尺二寸六分周圍一尺八寸てすから、長さが太さの約二倍ある勘定てす。小さな方は長さ一尺一寸で周圍一尺八寸あり、神功皇后が三韓征討の時に、御腰にはさんだ石であると言ひ傳へて居ります。」

丁「神功皇后は二つも石を腰にはさんだのてす乎。」

五九郎「腰にはさんだのは一つ乎二つ乎知りませんが、祀つて居るのは大小一對てす。」

丙「何れ長い方を……」

丁「石ではあるまい異志……」

此時恰も汽車が松島驛に停車したので、二名の學生はあわてゝ下車し、燈籠流しを見に行つた。

三十七　刈田之岳噴火

我々は其儘乘り續けて仙臺で下車すると、市街は火の海と化して居る。是が仙臺自慢の盆火である事言ふまでもない。散歩ながら樣子を見ると、老人連が尻を火にあぶつて居るのもあれば、其火を飛び越えて居る若い者もあり、トウモロコシをあぶつて居る婦人の多いのが殊の外に目につく。

甲「何の爲にあんな事をするのでせう。」

乙「藩祖公政宗が防火上から盆火を奬勵したので、德川時代には馬上の武士が盛に盆火を飛び越えたものだと乎、下宿屋の老人が話しました。」

五九郎「近頃仙臺に大火が有つたが、其際に、昨年米暴動で盆火を禁止したから大火に成つたのだと、言つた迷信家が有りませんでした乎。」

乙「別にそんな話は聞きません。何乎本當に火事と盆火との間に關係があるのですか乎。」

五九郎「耶蘇敎では、盆火を燃やした灰が火災除になると信じて居るので、政宗が耶蘇敎を奬勵したから、間接に盆火が盛に成つたのです。和蘭で十九世紀の中頃に是を禁じたが、其際に、

人が盆火を燃やさゞれば、神は人家を燃やす

と言ふ諺が出來て、近年火災が多くなつたのは、盆火を禁じた結果であると、宗敎信者は盛に當局を攻擊したものです。」

甲「迷信家と云ふ者は、仕樣のない者ですな。」

乙「迷信の多いのは日本ばかり乎と思つたら、西洋にもあります乎ね。」

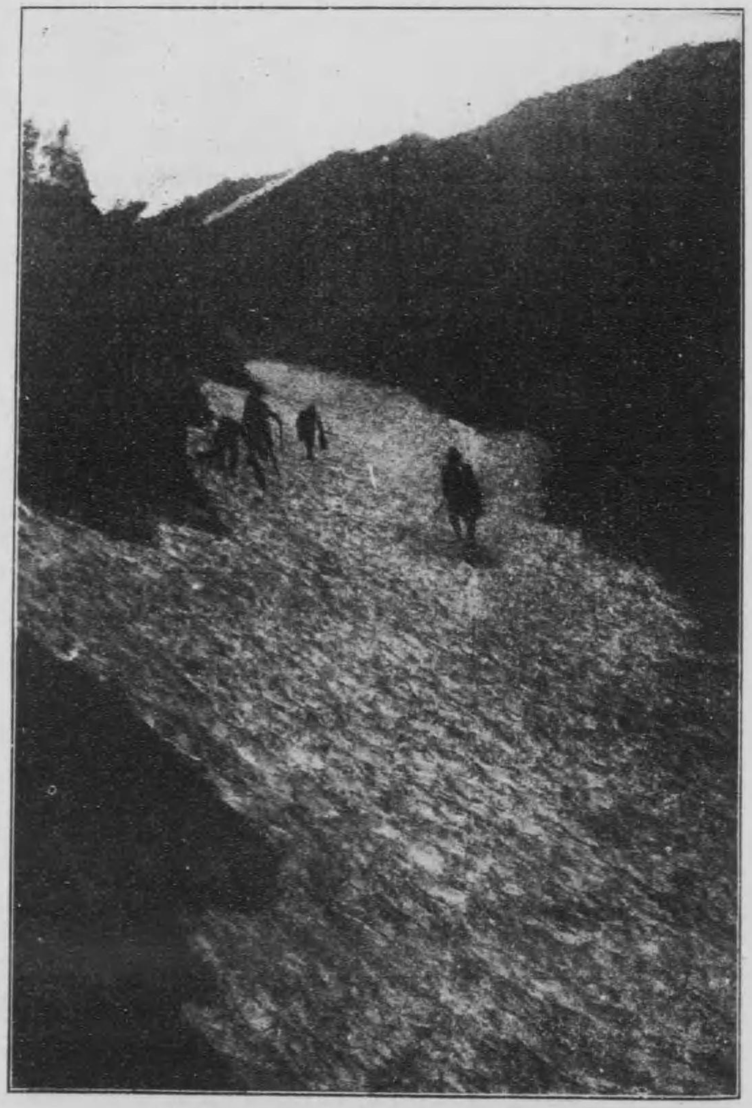
五九郎「佛國人などは、盆火を三度飛び越えれば赤子でも歩ける樣になると言つて赤子を抱いて盆火を飛び越えて居る者もありますよ。」

三太郎「正月の飯を澤山喰べると言ふと同じ事て、盆火を三度飛ぶのは三年經つ事て、三歳になれば歩けるのは當然てす。一夜の中に三度飛んても何になるもんてす乎。それだから錯誤が迷信の根源と成ると言ふのてす。」

五九郎「盆火て湯を沸かして湯浴すれば、結婚が出來ると言ふのなどは罪のない方だが、盆火の灰を井戸に入るれば井水が清水になると乎、灰を呑めば肺病がなほるなど云ふ迷信に至りては、度すべからざるものだね。」

三太郎「それだから、西洋ては禁止する事に努力したのてす。」

旅宿に就いて話を聞くと、近頃刈田岳が噴火をすると云ふのて世間ては大騒動てある。行つて見ようと相談決した。御東と乎御西と乎言へば、讀者諸君は必や肉食



三伏の炎天に萬古不滅の氷雪を踏んで登山す

第四一圖（三七八頁參照）

妻帶蓄妾勝手の本家本元たる、東西本願寺の事を合點するであらませうが、山形地方では必しも左樣でない。御西と言へば湯殿山の事で、御東とは藏王山を指すのである。東西何れも靈山で、男子十四五歳に達すれば必ず是に參詣するのが不文律で、熱心家は殆んど毎年登山する。日本では可愛子に旅をさせよと言ひ、西洋には旅行が人物を作ると云ふ諺があり。此地方の人々は高山に登らざれば、一人前の若者に成れぬと信じて居る。事實上登山は何よりの良い修養である。

同行四名の者が大河原で下車し、永野まで三里、車を飛ばした。一名の車夫は病身乎、兎に角十分に走れぬ。永野發の輕便鐵道に乘り遲れる恐がある。故に、途中で車夫を取り換へた。一名の地方有志家は自轉車を飛ばし、我々一行が着くまで發車を待たしてくれと傳言した。一哩も行かぬ前にタイヤが爆發した。刈田岳爆發の前兆乎と恐怖した同行者もあるらしい。次の村から巡査が自轉車で馳せた。松川を渡れば間もなく止轉所(してんしよ)である。

車夫「明治の爆發の際には、此邊の川でも魚類が大概死にましたです。死なない迄も非常に弱つたので、手づかみで捕へる事が出來ました。」

發車後間もなく機關車に異狀があると見えて、蒸汽が猛烈に機關手の方に噴き出して來た。乘客は汽鑵の爆發乎と恐れた。一里餘にして停車すると、

社員「下車して御茶を一つ。」

五九郎「此處で暫らく休みますのですか。」

社員「約三十分程あります。」

學生甲「田舍の汽車は呑氣だね。三十分走つて三十分休むの乎。」

乘客甲「此先は小妻坂と言つて急勾配ですから、茲で汽壓を高かめ馬力を出して登るのです。何所乎の古い機械を買ひ込んだから、充分馬力が出ないと言ふ噺です。」

乘客乙「此道は、上りには徒歩の方が汽車よりも早く着く事があります。」

學生乙「此處もやはり十勝之國と改名するかね。」

五九郎「休んで御茶を飲んで居るのなら上等の方です。此先にある角田行きの輕鐵などは、河の堤防を登り切れずに、二度も三度も後戻りしては馬力を掛けて走り出し、坂の中途で止まつて仕舞ふのだから、心細くなるよ。」

社員「此左二三丁の所に松川が流れて居りますが、此前に御釜が拔けた際には、泥水が非常な勢で三時間程流れましたです。」

遠刈田溫泉に着したのは案外に早いので、更に青根か峨峨まで前進する希望であつたが、刈田嶺神社の社務所が此所にあり、案内者も此所から出るのみならず、地方有志家が、明日同行したいと云ふので、茲に一泊した。

神官「仲秋の名月に際しては、例年約二千人の登山者がありますのに、本年は丁度新聞に噴火の記事が出た後であつた爲に、僅か七十餘名に過ぎませんでした。」

教員「二三日前に登山した者の話に依りますと、御山に澤山住んで居る岩燕は、近來殆んど全滅し、其死體が到る所に散在して居るから、多分刈田岳に龜列を生じて

毒瓦斯が噴出したのでありますまい乎。」

旅店主人「當溫泉には何等の異狀は御座いませんです。御入浴に成つて見れば直ぐ知れる事ですが、御釜樣の濁りましたのは、春以來の天氣續きで、御釜の中の水が二丈餘も減水したために相違ございません。」

刈田岳と言ひ、御釜樣と言ふのは、抑も何物である乎と言へば、先づ藏王山の本體を說明しなければならん。藏王山は、陸羽山脈卽ち奧羽地方を裏と表に兩斷して居る連山中の最高峰て、有史以前に大活動をした火口に水を湛へて居るのが、通稱御釜樣と尊敬され、此處が靈場の御本尊である。續日本後記に依れば、承和十一月の八月丁酉、卽ち今を去る事千百七十五年前に、陸奧國無位勳九等刈田嶺神に從五位下を授け奉る。靈驗あるに依ると云ふ記事があり、同十五年五月正五位に、貞觀十一年十二月從四位下に累進して居る。

靈驗とは何乎、山が祀られた最大の理由は、時々噴火して慘害を蒙らした點にあ

第四圖　藏王山　口火噴山（明參頁二八三）

る、山ばかりではない。自己の力にて防禦する事の出來ぬものは、人間でも、獸類でも、自然物でも、凡て是を神として吾人の祖先が崇拜したのである。日本語の尊いと言ふのは、タフトイの變化で、タは附辭で太(ふと)いの意であると、國學者は說明する。少し太い者はヅブトイ惡漢として制裁を加へられるが、大に太い者は尊い神として祭られたのである。

藏王山の最高點は、御釜の西北にある熊野岳で海拔六千百四十尺、次は南方の刈田岳で五千八百七十尺あり、更に御釜の東方に五千五百八十尺の五色嶽がある。それ〳〵羽前、磐城、陸前の三國に分屬し、五色岳と刈田岳とを區分する八百餘尺の深谷に三途之川流れて居るが、御釜は表面上に排水口を有せず、五色岳の山腹より透出する水が水源を成して居る。

午前三時神官が打ち出す太鼓の音に床を出で、天を仰いで見ると、一二等星が雲の切目から輝いて見え、氣壓は前夜來不變にて、天候の快晴を暗示して居る。同行

者は十餘名で、各種の職業を含み、恰も假裝社會行列の如き奇觀を呈して居る。深林中を進めば、左側に杉垣の圍地がある。

案内者「是が傾世塚と云ふ名所です。此先には衞門塚と言ふ所があります。寶永元年刈田岳噴火の際に、伊達政宗公の第十子右衞太郎宗高を生埋にして、山神を祀つた所です。」

甲「伊達政宗も亂暴な人間だね。自分の實子を殺して火山を祀るとは怪しからんでは無い乎。」

神官「生埋と言つても本當に生きた人間を埋めて仕舞つたのではないです。其人の氣息を竹筒に封じてそれを埋めるのです。」

乙「成る程それで氣息埋と言ふの乎。丸で神樣をペテンに掛けるのですね。」

五九郎「政宗が島津公と碁の勝負をして負けた時に、豹の皮千枚を取られたが、大久保彦左衞門が五千兩で請負ひ、俵の皮と言つて、米俵千枚島津家に渡したと言ふてはない乎。」

三太郎「或人が岩沼の竹駒稻荷に願を掛けて、成就すれば魚を千匹奉納すると約束したが、後日になつてから糠海老を一皿奉納したさうです。是には流石の竹駒樣も苦い顏をしたが、數へて見れば千匹以上あるので、今度ばかりは人間にだまされたと言つたさうです。」

こんな話をしながら、三階瀧、物見岩、不動瀧などの名所を遙かに眺めて、約二里半を進みて、賽之河原に入り、更に之を横斷して數町行きますと、坂が少しく急になり、右の方遙に不歸瀧が見え、岡の上に大黑天が祀られて、附近は奉納せる白米を以て埋まつて居る。同行者の一人が、

乙「此米を利用して養鷄場を建て、茲で生玉子を賣つたら、人助けにもなり、利益にもなり、一擧兩得だね。」

と名案を出したら他の一人は、

旅店主「嘗て養老の瀧の噺を聞いた人が、刈田岳の頂上一面に、飯や米で積み上げられて居るのを見て、必や内部は醗酵して居る筈だから、何處乎谷間に酒が湧いて居るに違ひないと信じ、根氣良く御澤を二三個月間探檢した者がありますが、失敗しました。」

と語つた。

三十八　大黒様

大黒様の建てられた所が追分で、左の道を登れば刈田岳、右の道を降れば御澤を經て御釜様に出るのである。何れにしても、此先は嶮峻であるから、此所で持參のビールや、サイダーを出して、大休息をやつた。中には晝飯を半分だけ喰べた者も二三名居る。

乙「夷子と大黒とは一對乎と思つたら、此所には大黒だけ有つて、夷子がないです

大黒天神　第四三圖（三八七頁參照）

第四四圖　（三九六頁參照）

山腹に刻まれたる險道、上は刈田岳にて下は御澤
岩下に立てるは三太郎と五九郎

ね。」

甲「女人禁制の靈山だから、夷子は遠慮したのでせう。」

旅店主「大黒樣は佛敎の神樣で、夷子樣と關係がないので、御一體だけ御祭りするのが通例です。大黒天神經を見ますると、大福德圓滿自在菩薩と稱し、娑婆世界に來りて大黒天と顯はれ、一切の貧窮にして福無きの衆生に大福德を與ふとあります。佛家では大黒天を拜するに、マカカラヤソワカと稱名するが、摩訶は大の義で、伽羅は黑色の意であります。原名は摩訶伽羅天神と云ふのを、大黒天神と譯したもので、其形態は青黑雲色にて、大忿怒の相を顯はし、足下に地神女天を踏み、壽は無量歲と說いて居ります。」

商人甲「大黒樣は其性三寶を愛し、五衆を護持し、損耗なからしめ、求むる者には、與へ、殊に食時に當りて來り乞ふ者あれば、必ず所有の飲食物を與ふると云ふ事です。それ故に佛寺では臺所に大黒天を祭り、臨時の雲水來る事あるも、是に食事を

分配する事を訓めてあるのです。」

學生甲「それで僧侶の妻君を大黒さんと言ふのです乎。臺所を司る神さんですから」

商人甲「禪宗の寺では、今でも粥を煮た後に旅僧が來れば、此の粥の中に適當の湯を混和して、不足なき樣に分配します。」

學生乙「それならば何時でも出來る筈ですね。ビールが足りない時には水を割れば良い譯で。」

神主「佛說では左樣乎も知れませんが、日本固有の神にも大國樣があります。本名は大己貴命（おほなむちのみこと）で、一名大國主命（おほくにぬしのみこと）と言ふのが夫であります。或は葦原醜男（あしはらしこを）とも八千鉾（やちほこ）神とも申され、總て八種の尊稱があると傳へられてあります。古事記に書いて有るのを見ますると、皇宗皇祖が未だ高天原に在りし時代に、既に出雲國にありて、日本國を支配せられたのが大國主命であります。然るに、天孫瓊々杵尊が豐葦原を平定せんと、武甕槌命（たけみかつちのみこと）を將軍として出雲に遣はされた時に、大國主命は本國を天孫に奉る事に異議なきも、自分は既に隱居の身分にて、子息の事代主命に凡てを任せてあるに依り、其意見を尋ぬべしと言つて、當時事代主命が出雲國三保が崎にありて釣魚をなし居りし所に、稻脊脛を使にやりたるが事代主命も異議が無い。現今の言葉で言へば、父子共に政權を捨て、野に下り、政治の方は天孫に讓りて、自分等は商業及び農業に從事したのであります。此故に實業界に於ては、夷子樣と大國樣とを福神と崇拜するのです。然るに大國と大黒と同音であるから、例の弘法大師が佛敎を日本化する手段として、大國を大黒に書き改め同一體としたのであります。」

商人乙「大黒樣はどう乎知りませんが、夷子樣は事代主命でなく、蛭子命（ひるこのみこと）であると聞いて居ります。蛭子命は伊諾、伊冉兩神の間に生れた子で、初に日靈女（ひるめ）生れ、次に月讀命生れ、終に日兒子（ひるこ）が生れた。第三子であるから夷三郎とも稱へる。日靈女は卽ち天照大神で皇位に昇りたるに依り、後世の學者は支那の敎にかぶれ、天に二日無しと稱し、日兒子を蛭子と書き改めたに過ぎん。蛭子命は三歲になるまで足の

立たぬ不具者であつた。

かぞいろは、如何にあはれと思ふらん
三歳になりぬ、足立たずして

と言ふ歌が殘つて居ります。日本語では、常に異りたるものを凡てエビスと云ふので、外國をエビスと呼び、昔は奥羽地方の人をもエビスと言つて居ります。此故に蛭子命をエビス様とあだなしたのださうです。此不具者を石樟船に乘せて海に流したから、民間に降りて漁夫となり、一生を送られた。從て貧苦無縁にして世に頼りなき者は、此夷子様を祭りて自ら其不遇を慰めるのであります。」

學生乙「それでは何れにしても、夷子様も、大黒様も、共に男子で夫婦ではないのですね。私は何時でも揃つて居るから、男女の神様乎と思つて居りましたが。」

五九郎「諸君の御説も一應尤な話ですが、私の知つて居る所では、夷子様と大黒様はやはり一對の陰陽神であります。家には大黒柱と言つて、中央に一番太い柱があり、是に大黒様と夷子様が祀られてありませう。又京都には大極殿と言ふのがあります。大黒柱は元來は大極柱と書くのが正當です。前に述べられた大黒柱とは全く關係の無いもので、陰陽道に基いたものです。易經に大極は陰陽を生じ、陰陽は四象を生ずとある如く、宇宙の始に當りて萬物未だ發生せざるに際し、只一つ無形無性の自然力がある。他日萬象を生ずべき勢がある。是を大極と言ふのである。此大自然力が變動すれば、形あらはれ、陰陽の性が生ずる。陰陽和合すれば、續いて萬物生ずるのである。然るに、一家は一個の小宇宙にして、先づ一本の柱を立て、是より棟梁を定め、次第に家の形を成す故に、此一本を大極柱と云ふのであります。大極は陰陽の働きに依て初て萬物を生ずるものであるから、大極柱に陽陰神を安置して一家の繁榮を祈るのは、自然の順序でありません乎。其所で陰陽の神はどんな肖像に造るべきもの乎と言へば、男女の生殖器より外に、適當な形は無い道理でせう。」

神主「左様承れば或はさう乎も知れません。其陰陽神と日本在來の大黒夷子とを混

じて居るのでせう。實は大國主命や事代主命ならば、之を祭るのに、晝間を取られずに夜毎に眞夜中の子の刻にするのは了解し難いと思つて居た所でした。陰陽神ならば、眞夜中に祭るのは當然の話です。」

五九郎「眞夜中は時刻で言へば子の刻であるから、且つ子は十二支の始まりであるから、子の月の子の日の子の刻に祭るのです。」

學生甲「陰陽の神なら寢祭りの積りでありません乎。寺では寢る時に神さんだから細君を大黒と云ふのだと誰乎が言つてましたよ。」

學生乙「夫では大黒様が踏んで居るのは米俵でなくて、陽性のものに附屬して居る例の二つですな。」

五九郎「勿論さうです。大黒様の帽子だつて、始め陽物の頭の形から割出して、少しく美化しただけです。」

商人甲「打出の小槌はどんな關係があります乎。」

三太郎「それは形而上の事柄で、大黒様の働きを形の上に示した丈です。德川時代の裸體踊に、天子様でも公方様でもと言ふ文句があるが、釋迦や孔子の如き大聖人を始めとして、どんな者でも振り出す勢力を持つて居るでありません乎。」

學生甲「成る程、左様言へば凡てがあれから振り出されるのは爭はれませんが、夫では陽性の神を大黒様と云ふ理由が不明になりますね。陰陽に分かれぬ以前の者が大極ですから。」

三太郎「陽性の者を大黒と言ふのは、大極の意味ではなく、讀んで字の如く大に黒いと言ふ事です。諸君が入浴した際に身體檢査をして見たまへ。第一番に黒い所は何所でありますか乎。泥湯屋に行つても、あそこ丈は三助に流しても貰はんから黒い筈です。」

旅店主「それですと、佛敎で說いて居るのも同じ事になりますね。大忿怒形を作して地神女天を下に敷いて居るとありますから。」

商人乙「其話を聞けば、大黒様に二俣大根を供養したり、供物は凡てあはび殼や、蛤貝に盛るのも相當の理由があるのですな。」

商人乙「大黒様の形は夫で良いとして、夷子様はどうです乎ね。」

神官「夷子様が現今の形を取りたるは、神功皇后筑紫よりの歸途に、西宮廣田大明神主にて、夷三郎と稱する者、鯛を献上し、直許を得て、朽廢せる社殿を再興せる功に依り、後世の者が氏を其末社に祀り居りしが、堺の商家此宮を崇拜して富家となり老後に及んで參詣する事能はざる爲め、神主が鯛を持ち行く像を作り、御神體として自家に安置したのが始めてあるとあります。」

學生乙「陰性の物とすれは、其模形を美化すればあんな形になるのは自然でありませんかね。シベリヤ地方では、今でも婦人の陰部をエビスと言ふので、エビスビールが賣れないと云ふ噺を聞いた事があるが、日本語で形の醜き者をエビスと言ふから、最も適當な名でありません乎。」

商人甲「私が聞いて居る所では、人皇三十四代推古天皇九年三月、聖德太子が市を開いた時に、夷子様を商賣鎮神と定め、自然石の夷子様を市場に祀り、不德義の事をせぬ様に、其前で取引を行はせたと云ふ事でした。」

學生乙「私の地方では正月の神市に祭る御市神様と言ふのは、矢張り自然石で、路傍に置いてあるが、其古事から來たのですかね。」

大黒様の噺が次第に花を咲き、何時議論が終結するとも思はれなかつたけれど、時計を見れば餘りに時間が經過して居るので、早々出立して右の道を取り、御釜様に向つて急いだ。

學生甲「今の説明の様に、果して大黒様が陽像であるとすれば、そんな者を崇拜するのは愚の至りですな。」

三大郎「左様では有りません。人生最も大切に成すべき者は此大黒様で、近頃の青年學生が神經衰弱にかゝるのも、其根源は大概自分の大黒様を虐待する天罰です。」

大黒様に決して手を觸れん様に敬遠して置けば、いくら勉強しても神經衰弱になどは成りません。青年ばかりでは無い。僅かに四十歳前後で、初老だなんて早く老衰するのも、皆元氣に任せて大黒様を濫用する結果です。大黒様の天罰は實に恐るべきもので、痳病や梅毒も皆さうです。大黒様を若い時から大切にすれば、無量歳の天壽を保つ事が出來ます。」

三十九　新平民

大黒山から御釜様に通ずる途は、刈田岳の中腹をなす絶壁に刻まれた二三尺の小路で、右側は三百餘尺の深き谷、左側は數百尺の斷崖、頭上に壘々たる岩石が將に轉落せんとして居る地點を通過する際には、吾人の生死が單にあの石塊一つが落下すると否とに依て決定せられるものであると思へば、我ながら人生の微弱なるを感じ、此石を任意に左右する山之神が實在すると信じて居る人が此場合其山神に哀願するのは當然であると云ふ樣な考が、何時の間に乎顯はれた。愈々御澤に達すれば、河底に壘々たる岩石を飛び越えて、水源指して昇るのであるが、右手なる五色岳の麓からは、白や赤の沈澱物を殘す礦泉が盛に噴出して居る。御澤の將に盡きんとする地點に近き所に、奥深き洞窟がある。

五九郎「あの穴は何です乎。」

案内者「あれは、嘗て硫黄會社で、此所にトンネルを穿ち、御釜を排水して、硫黄を採取せんと企て、掘つた穴です。自然に出來たものではありません。」

五九郎「亂暴だね。其穴を御釜に屆く迄掘つて行つたら、其際に從業して居る工夫は全部死んで仕舞ふにきまつて居るでない乎。」

三太郎「資本家は人の生命など云ふ事は始めから眼中に置かないので、死んだら少しの慰藉金を與へれば差支あるまいと、始めから一人いくらと勘定して仕事にかゝつて居るのです。」

學生甲「それでは、嚴密に言へば、工夫の死亡は資本家の謀殺犯に依るのですね。」

三太郎「理論上は左樣ですが、法律は資本家の子分が立法し、資本家の傭人が之を實施するのであるから、資本家を起訴する樣な事は無いさ。」

學生乙「資本家が見廻りに來た時に、其處に布設したトロンコに載せて、谷の方に押してやり、其トロンコが重力の作用で自然に加速度を得て、谷合に墜落して死亡したら、工夫は罪になります乎。」

五九郎「無論殺人罪になるさ。こんな所で人をトロンコに載せて放してやれば、最後に死ぬ事は初から知れ切つた事ですもの。」

學生乙「法律と云ふものは勝手なものですな。かうすれば人が死ぬと云ふ事が前以て知れて居る場合でも、資本家がやれば無罪で、勞働者がやれば有罪と云ふのは。」

三太郎「誰だつて、自分に都合の惡い法律を作る馬鹿はあるまいさ。」

左側にある約百五十呎の絶壁を這ひ登りて御釜の南側に達して眺むれば、湖水は

噂に違はず灰白色に濁濁して居る。恰も牛乳に灰を混ぜた樣な色だ。右の方五色岳の直下は約三百尺の斷崖であるが、岸に近き所に活働の中心が見える。大なる物二個、小なる物六個、合計八つの中心を以て水面が上昇し、四方に流れ去る有樣が歴然と知れる。

神官「硫黄會社が、決死隊を組織し筏を組み、御釜の測量を決行しました事があります。精しい事は忘れましたが、現に活動して居る所は最深點で、二十七間餘ある筈です。」

案内者「私は明治の噴火の時に來て見ましたが、今の活動點から盛に噴烟して水を追ひ拂ひ、湖底が露出したのを見ると、十一段に分かれてあります。時々水が噴火口の附近まで押寄て來まするとと、硫黄に點火して火は汀を走り、頗る奇觀で御座いました。」

左に歩を轉じて御釜の西側に迂回し、湖岸の砂濱に下り立ち水溫を測定して見る

と、華氏七十八度であるが、刈田岳の山腹には白雪が殘つて居る。砂上に腰を下して中食を喰べて居ると、水際から氣泡が出るのが目に付く。」

強力「御釜樣の樣にこんなに長く止まり、おまけに食事までするなどは、是迄例の無い事です。」

神官「今日は刈田岳の御病氣を診察に來たのですから特別です。」

旅店主「今日の樣に天氣の好い事は珍らしいです。是では迚も噴火するなどとは思はれません。」

強力「此前に御釜が拔けた際には、峨峨溫泉で約三十分間泥水が流れ、溫度は體溫程でありました。」

學生甲「輕便鐵道で聞いた時は、約二時間と云ふ噺が無かつたです乎。」

五九郎「下流に成る程時間は長くなるのです。此所で御釜の水が向ふの自然的堤防を飛び越えて溢れるのは、僅かの時間ですが、御澤を流れるのに、前の水は勾配が急であるから早く流れるけれども、後方のものは前後の水面の差に基いて流れるのである故に、勾配は緩くなつて遲い故に、前後の距離は下流に行くに從つて長くなるのです。」

白雪を踏み頂上に登り、刈田嶺神社に參拜して見ると、玆にも澤山の米が散亂して居る。

三太郎「米騷動の起る今日、米をこんなに捨てるのは、いくら神でも勿體ない樣に思はれるね。」

學生乙「米騷動で思ひ出したが、特殊部落と云ふのは何の事です乎。新聞に其後始終出る樣に成つたですね。」

五九郎「特殊部落と言ふのは、新平民の部落の事です。元來平民で無かつた者が、新に平民に編入されたから、新平民と言ふので、別に左樣な區別が法律上には無いのです。」

學生乙「それては、華族の次男で分家したり、士族から分家した者が新平民と言はれるのですね。長男は襲爵して華族だなんて威張るのに、同じ兄弟でありながら、次男以下が新平民で輕視されては、不平を起すのは無理はないね。」

學生甲「道理で新平民が京都邊に多く、東北地方には稀有なのだね。華族や士族が尠ければ、夫から分家する新平民も少い筈だから。」

學生乙「今の總理大臣なども、士族の二男が分家して平民に成つたと言ふから、やはり新平民乎ね。」

學生甲「それては新平内閣乎。」

學生乙「後藤新平の内閣と間違へるから、平民内閣と言ふ方が通るてせう。」

商人乙「濟生會の雜誌に、德川公が特殊部落を訪問した時の寫眞があつたのを見ると、何れも立派な人物ばかりだから、貧民にしては變だと思つて居たが、やはり貧民ではないのです乎。華族の二男三男とすれば立派なは當然ですな。」

三太郎「丸て間違つた話ばかりして居るね。新平民と云ふのは德川時代の穢多の事です。」

五九郎「新平民と云ふと、今の樣な誤解を起す本になるから、華族仲間では自分の分家した弟に遠慮して、特殊部落なんて云ふ名稱を案出したのかね。」

こんな話をしながら、大黑樣の前も知らぬ間に通り過ぎ、下り道は案外樂な爲に行き過ぎてから氣附き、少し戻りて新關温泉に行き一泊した。

四十　賽之河原

新關温泉から十數町、五色岳の東方に分け入れば、毒瓦斯噴出所がある。

案内者「冬は往々兎が死んて居ります。私は子供の時から此邊の山中を歩きまはつて、能く知つて居りますが、萬一人が此瓦斯て倒れた際には、アンモニヤを嗅がせれば全治します。昔はそんな物を知らないから、冷水をあびせたり、脊中をたゝい

たりしたものです。」

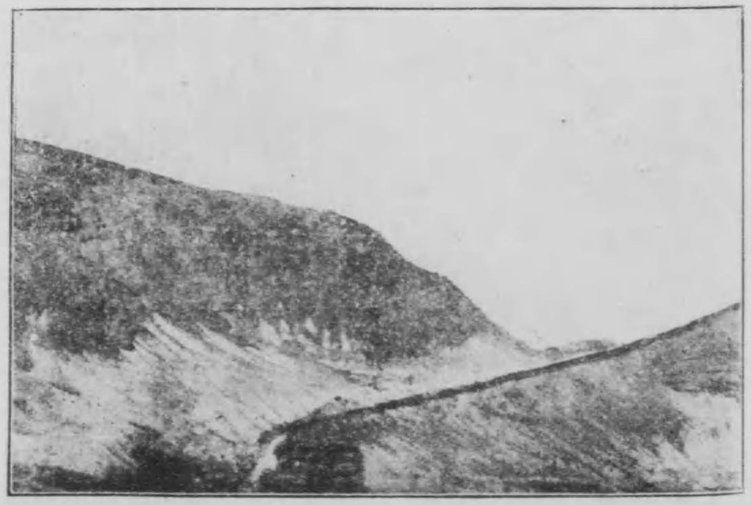
五九郎「夫では昔からあつたのです乎。近頃出初めたのではないですね。」

案内者「此所の瓦斯は昔から有名なもので、元はガッ〳〵と大きな音を立てゝ噴出したものです。此下の溫泉を峨々と云ふのは其爲です。」

是より谷川に沿うて下ること約半里程で、御澤に合する。御澤の上流は無色透明であるのに、下流では濁川と云ふ別名で知られる程に、溷濁して居るのが一つの不思議と言はれて居る。然るに今此所の落合ふ所を見ると、西河の水は共に無色透明であるが、何れも礦泉である故に、此所に豐富なる赤色の沈澱物が出來る。更に少しく下つて行くと、右の方賽之河原から流れて來た小川と合した所に、白色の沈澱物が出來る。是等の沈澱物が濁川の素因をなす事云ふまでもなし。

夕方に峨々溫泉を出發して賽之河原に到れば、日は既に暮れ、見渡す限り岩石壘々たる平原の其所此所に、積み上げられた大小の石が鬼の如く立つて居る。雲霧かすか

賽の河原の積石　第四五圖（四〇四頁參照）



熊野岳山麓　第四六圖（四一〇頁參照）

に山野をかくし、草木だに見えぬ物すごさ靈鬼骨を打つの寒林にも優る恐怖がある。

學生甲「何の爲に石を積むのでせう。」

商人乙「茲は有名な賽之河原です。子供が死ぬと賽之河原で石を積ませられる。漸く積み上げると青鬼や赤鬼が來て是をくづし復た積ませる。其所で娑婆に居る兩親が、子供に手傳ふ積りで積んでやるのです。」

學生乙「一體赤鬼や青鬼なんて居るのかね。人類には白色、黃色、銅色と云ふ樣な區別はあるが。」

五九郎「印度に居りませう。南洋に行きますと熱帶ですから、裸體で居るが、日光に當ると皮が燒ける、是を防ぐ爲に種々の香料を交ぜた塗料があります。日本では化粧と言へば、婦人連が紅や白粉を口や顏に塗るだけであるが、熱帶地になると裸體で居るから、顏丈では駄目である事勿論で、身體一面に化粧する。私が見たのは赤と黃で有るが、生薑の一種から製造した物を、椰子の油でとかし、是を身體に

塗り附けるのです。立派な體格をして、山刀を持つて居る人夫を見ると、地獄の繪にある赤鬼そつくりでした。つまり赤鬼、青鬼と云ふのは、こんな塗料を使用して居る獄卒に過ぎないので、普通の人間です。」

學生甲「それにしても地獄に居る子供の代りに、此婆婆に居る人間が石を積むなどは、馬鹿な噺で、迷信の極端でありませんか乎。」

三太郎「現今では全くの迷信ですけれども、元來は必要上から出來た有益な事業なんです。昔は野山に分け入る際に道を迷ふ恐がある故に、路傍の樹の枝を折りて目標とした。夫が卽ち枝折（しをり）の起源であると諸君が中學あたりで國語の先生に說明を聞いた筈です。然るに、考へて見たまへ。此處の樣な岩石壘々たる山中で、一本の樹もない所では、其枝折が出來ますまい。今日の樣に霧が掛つて來たら全くの五里霧中で、方角も何も知れはしない、行方不明になるにきまつて居る。其處で、路傍に石を積み上げて置けば、其石が目標になるので、賽之河原の積石は全く一つの指道標です。」

學生乙「それならば、宗敎などに關係なく、枝折の樣に明白に通行人の道案內に成るからと言つて積ませたなら好いでありませんか乎。」

五九郎「それは駄目です。大正の今日でさへ、地方青年團などが折角指道標を建設しても、多くは其時限りの流行で、一年も經てば指道標が引き拔かれて捨てられたり、立つて居ても文字が讀めない程に成つて居るのが大部分ですもの。況んや昔の人間相手には到底駄目であります。殊に、折つた枝を元に直す事は出來んが、積んだ石をくづすのは容易である故に、折角積んでも面白半分に倒す者が多い。其不良登山者が卽ち赤鬼、青鬼の徒なんです。然るに、稅金と言へば十錢出すのも滯納する程の人でも、極樂に行けると言はるれば惜氣もなく百金の寄進をするのが、慾の世之中に生れた人間の常性です。死んだ子供の菩提の爲と言へば、白粉がはげるのも知らずに石を運ぶのは婦人の情である。此弱點を利用したのが、賽之河原の石積

てあります。」

三太郎「それが現今では、宗教的形式のみが傳はり、最初の目的が忘れられた爲に唯石さへ積めば良いと思うて、迷信家が處嫌はずに積むから、見たまへ、此通り何所に行つても積石があるので、少しも指道標にならないのです。かうなると全くの迷信で、有害無益に了るので、子供の遊び事に過ぎんてす。何時乎も言つた如く、最初必要上から出來た有益の事も、之を永く保存する爲に、宗教的形式を加味して置くと、末世の宗教家は其形式のみに重きを置く故に、竟には兒戯と化するのです。」

賽之河原を過ぎた頃には全く暗くなつたが、大聲を出して進むと、之を聞き付けた溫泉場では、各室に燈火を點じたので、俄に元氣を回復し無事歸宿した。翌日更に御釜を見舞ひ、險を犯して東北方に絶壁を這ひながら廻つて見ると、沸騰する如き音が聞え、三分乃至五分時を週期として、恰も水鐵砲を水面下にて放つが如く、非常なる勢にて水が空中に飛び上る所が澤山點在して居る。空模樣が次第に險惡となり、滿天雲に包まれ、竟に雨と化した。刈田嶺神社に引き上げ、小屋内に休息して居ると、山形方面から二十餘名の行者が登山した。

「アーヤニ〳〵、グスシク、タフトキ、カッタノ、ミーネノ、カーミノ、ミマイニ、オロガミ、マーツル。」

と神官の聲が岩打つ雨の音に混じて聞える。茲て中食を喰べたが、同行者の誰乎が牛肉の罐詰を開いて出すと、

强力「そんな物を持つて來るから、こんなに御山が荒れて來たのだ。」

と獨言を言つた者がある。

神官「昔は佛教ですから精進したが、今日では神道ですから差支ありません。」

五九郎「神道では山の幸、海の幸と言つて、海山の珍味を神前に供へるのが正式だ。牛肉でも鯛の刺身でも、新鮮な程結構である。參拜するにも、佛教ならばサーンゲ〳〵ロッコンショウジョウと云ふ調子で禮拜する筈であるのに、今の行者は、アー

ヤニ〳〵と言つて禮拜したから、彼等だつて神道に違ひない。」

と説明しながら、罐詰の大部分を一人で喰つて仕舞つた。

我等一行四名は山形縣の方に下降するので、是迄の同行者多數と別れる事に成つたが、先に二十餘名を案内して來た山形方面の者が、我が一行を先導する事に決定し、降りしきる雨が止みかけたを幸に、刈田岳を後にして熊野岳に向つた。

案内者「近頃は毒瓦斯が噴出するので、岩燕がどん〳〵死にます。先日私が御釜樣に下りた際にも、二三十羽死骸がありました。」

五九郎「御釜のどの邊ですか。我々は一昨日も今日も行きましたが、一羽も見つかりませんでしたがね。」

案内者「あれ程澤山ある死骸を見逃す樣では、御釜樣に行つた甲斐が無いですな。」

それでは、再び下りて見樣と途中まで行つたが、再び雨が來たので中止した。

案内者「藏王山にある礦物ならば、一から十まで私が調査してあります。唯一つ此先にある何とも知れぬ約百五十貫位の岩が、私には見當附きません。……此石は明治二十八年の噴火の際に噴出したものです。」

五九郎「どうして夫が知れますか。」

案内者「此通り苔も何もなく、新らしく見えるでせう。横濱にある會社の技師を務めて居た獨逸人を案内して、陸羽山脈は殆んど踏破したが、時に磁石が狂つて、方角が知れなくなるのには閉口しました。何でもバグネットの作用だとか言ふ噺でしたが、バグネットと云ふのは何でせう。」

五九郎「多分マグネット(磁石)乎、マグネタイト(磁鐵鑛)の聞き誤りでありませんか。」

案内者「そんな聞き誤りをする私ではありません。慥にバグネットの働きです。」

五九郎「私は未だバグネットと云ふ物を見た事も、聞いた事も有りません。今が初です。」

學生は笑ひ出したが、案内者は極めて眞面目である。熊野岳の絶頂に達した時は、降雨しきりにして一行は寒さにふるへて居た事が、其際記念撮影の寫眞を顯象した結果明かに證明せられた。去りながら、其後間もなく登山した宮城縣立第二中學校の師弟九名が、風雪の爲に此絶頂で鬼籍に入るべしとは、何等の豫想もない。此所を降りて地藏岳の麓なる鷲小屋に來りて休息した頃には、雨全く止み、雲も消え、熊野岳は我一行を見送る乎の如く其頂上を顯はした。下るに從つて道は却て險惡となり、雨も亦降り始めた。中途に關所の如き假小屋がある。登山者は必其建物の内を通り拔ける樣に建てられて居る。

學生甲「道が違つたではありません乎。此處で行き止まりですよ。」

案内者「差支ありません。其家に這入りなさい。」

此所で暫らく休息して居ると、十餘名の登山者が登つて來た。小屋の主人は嚴然として住所姓名を尋問し、勿體らしく帳簿に記入し、通行許可書を與へ、通行稅を徵收した。」

山形中學校の生徒が三名、此處に休み我々と共に出發した所が、

關守「前の三名待ちなさい。」

生徒等は知らぬふりして道を急いだ。通行稅の一件である事云ふまでもない。」

案内者「あの番人は、夏になればあの通り髭を蓄へて玆に出張し、通行稅を取つて、秋になれば里に下りて、髭を刈り其金で酒を呑んで暮らすのです。」

學生甲「此山の持主です乎。それとも神主です乎。」

案内者「そんな者ではありません。正式の者ではなく、唯舊慣上昔から來て居るので、田舍者を押へて金を取るのです。本當は道修繕をする料金を昔は集めたのです。」

學生乙「丸で山賊の樣な者ですね。」

雨は次第に强くなり、生徒等は傘も持たず、長裾で草履をはき、道を急いで居る。案内者は面白半分に後の方から、番人が追掛けて來たぞと聲をかけたら、生徒等は

山賊に追はれた乎の勢で、ヘビーを掛け、夢中になつてスピードを出した。高湯溫泉に一泊したが、晩食後に生徒が訪問に來た。其話に依ると、七月下旬に御釜で水泳を試みたが、水が綺麗で有つた。然るに、當地の小學校教員で藏王山通を以て自任する者の話では、七月二十八日頃から溷濁し、更に宮城縣師範學校の生徒は八月一日に五十間程先きまで泳いで出たが、少しも濁らず非常に寒冷であつたと言つて居る。山上では、五月頃から既に濁つて居たと主張した同行者もあるので、問題は益々混亂するばかりである。彼等は何れも自身で直接觀察したのであるから、絶對に其主張を曲げまい。

斯くの如く異りたる觀察談を調和すべき唯一の鍵は術語之相違と云ふ事である。人類の言語は思想の代表であるが、同一の言語が必しも同一の思想を代表するものでない。例へば藏王山の濁川の水は濁つたと言つても、東京で自慢する玉川の水よりも更に澄んで居る。甲が濁つて居ると認めた水は、必しも乙が濁つて居ると認めるとは限らぬ。如何となれば清濁を判定すべき標準が定まつて居ぬからである。今を去る事十餘年前、ハレー彗星が地球と衝突すると云ふ天文學者の說が、世上に發表された時に、宗教家は待つて居ましたとばかりに、

宣教師「世界の終りが近附いた。豫言者の云ふ事に誤は無い。罪の子等は速に悔い改め、イエス・キリストの御名に依て祈れ、然らば救はれん。」

と說きまはつた。今日我々が生きて居るのを見ると、地球上の人が凡て悔い改めたとも見えず、從て衝突は無かつたと思はれる。然らば天文學者の說は誤乎と言ふに左樣ではない。事實上衝突しても、其相手が非常に稀薄な爲に、地球は碎けぬ。衝突すると言ふ前提から、碎けると言ふ結論を出す如き二段論法を知つて居るのは、無智の宗教家ばかりである。例へば我々が前進すれば空氣に衝突するけれども、顏が其爲に碎ける心配は無い。彗星の帚の如き尾の密度は、空氣の萬分の一程の密度あるに過ぎないのである。

昔小亞細亞の人達が、天に登らんとしてバベル之塔を築いたが、塔が高くなるに從ひ言語不通となり、竟に散解したと言ひ傳へられて居る。文明は天國に昇るべきバベル之塔であるが、文明の進歩と共に益々專門が分れ、分業が發達する故に、甲乙互に理解する事が出來なくなる。資本家は勞働者を理解せず、兵卒の言語は將校に通ぜず、國民の聲は爲政者に達せぬ。斯くの如くして社會の各員は次第に意思の疎通を缺く事に成り、最後に解散の運命に到達するのは當然である。現今の文明が突然瓦解し、全社會が離散する唯一の禍根は、相互間に於ける言語の不通である。現在に於ても、バベル之塔は可なり高い。空氣は稀薄に成つた。解散の時期も遠からぬ有るまい。

四十一　高千穗峯

大日本帝國が出來た起源を尋ぬれば、恐多くも天孫が高千穗峰に降臨なされた時に始まる。果して然らば、神社佛閣を巡禮する徒輩が、高千穗峰に足を向けぬのは不都合であるまい乎との念が湧いた。ポナペやサイパン邊の南洋土人が、黑潮に乘り颱風に吹かれて漂流したならば、海霧の内に小島あるを發見すべく、而して高千穗峰は眞先に彼等の眼に映ずる筈だが、嘗てはアイヌやクロボックルの横行した東北地方から見れば、高千穗などは海山萬里を隔てた異境の樣なもので、其所まで出掛けるのは容易でなく、膝栗毛で行つたら、東海道丈でさへあんな大冊の旅行記に成る。然るに、天孫が既に高千穗に御降臨成されたのが事實である以上、其遠い子孫に當る三太郎と五九郎が、同じく高千穗に天から降つても別に理論上差支ない筈である。讀者がそれを信じさへすれば良いので、信仰は理論でないから、飛行機で來た乎、それとも龍卷にまき上げられて來た乎などゝ云ふ質問は拔きにして、兎に角信じて貰ひませう。信じさへすればそれで救はれると云ふ噺である。是程說敎しても信ぜぬ不信神者があるならば、兩人が藏王山上で空中にはね上つた際に、地球は西から

東に廻轉し、同時に滿洲にある高氣壓の爲に西風が吹き、再び地上に落ちて見たら、都合好く其處が卽ち高千穗峰で有つたとしても差支あるまい。

三太郎「丸で草も木も無い、岩石壘々たる山だね。其所に綠青初菌（ろくしようはつだけ）を二つ重ねた樣な物のあるのは、何でせう。」

五九郎「是が卽ち天逆鉾と云ふ物さ。鉾を逆さに山の頂上に突きさした形に出來て居るからね。」

三太郎「此處を占領したと云ふ意味で、自分の武器を地上に突き刺したの乎な。」

五九郎「いくら天孫でも、こんな重い物を持つて歩けまい、是は歷史を土臺にして近頃建設したのさ。」

新井白石が霧島に登山した時の記事には、絕巓に到れば地を掃ひ石を疊み以て圍壇を爲る。徑は一丈ばかりなるべし。中に當て矛一枝を植う。古色蒼然として銅の如く、鐵の如く、其拔楕圓にして地を出る八寸、鋒鋩樹栝して存する所の物は長さ

鉾逆の天　（同上書三百八—四）

二尺、兩乃の廣さ二寸、脊之兩面には銘數十字を刻むが如きあり。乃の下の左右に劒鼻（つば）の如き物あり、細かに之を視れば、卽ち其象は鬼頭に類す。其背き突然として出る物は其四目なり。隆然として高き物は卽ち其鼻たり、鼻の高さ各二寸、瑰瑋奇桂畫狀すべからず。相傳へて云ふ、是は天孫初て降りし時に建て以て標となす。古之所謂國柱なりと有るが、現在ある逆鉾は丸で別物で、其後に建てた物である。

三太郎「兎に角良い場所だ。南九州は一望の下にあるのだからね。前は大隅で、右手が薩摩に、左手は日向でせう。」

五九郎「四望空濶にして三州の諸山は翠浪の如く起伏し、遙に海水洋々たる中に、儼然たる孤峰がある。あれが音に聞く櫻島乎ね。此附近には水が非常に多いね」

三太郎「それは凡て舊噴火口さ、昔は四十八沼あると言つたものです。此附近は霧島山系で、天平十四年の昔から今日迄千二百年間に、記錄に殘つて居る丈でも、大小六十回噴火して居ります。左手で一番大きいのは御池火口湖で、其手前にある小さ

いのが小池火口湖、それから一寸廻れ右をやつて見たまへ。右手の高いのは失岳、左手のは新燃鉢と云ふ名の如く、二百年前の享保年間に新に噴火したるもの、其奥にあるのが韓國岳で、海拔五千七百尺あり、霧島山中第一の高峰、其右のは大幡池、左のは大浪池、後にあるのは御池に不動池……。」

五九郎「良い加減に止めたまへ。山の後にある池まで見えはせんでない乎。」

三太郎「見える見えないは問題でないさ。其所に有ると信じさへすれば、肉眼を閉ぢても、山の後にあるのでも見えるでない乎。君の樣に肉眼に見えん物は說明せぬ事にすれば、天國や極樂の噺は出來ん事になり、宗敎家が飯の喰ひ上げになるよ。」

五九郎「天國や極樂はどうせ行つて見る事の出來ん所である故に、噺だけでも聞く氣になるが、山っ湖小は見る方が慥だからね。」

高千穂峰は海拔三千五百尺に充たざる山で、現今では深林なく、奇岩怪石なく、何等崇高の念を起さしむるに足るべき對稱物が無い。從て宗敎的には價値尠き如きも、幾千年の昔に於て、此山に登りたる者をして、其功名心を誘發するに十分なる地形を有して居る。西に向いて下る道は卽ち馬之背越と呼ぶ所で、右側は幾百尺の斷崖、左側は御鉢と尊稱する噴火口、其一部には綠色の水をたゝへて、他の部分よりは盛に噴烟して居る。遙に北方を見れば、殘雪白く、天候急變して霰を降らし、續いて玄雲天地に充ち、空中聲あれば山鳴り谷應じ、忽ちにして疾風奔馬の如く、我々を地上に伏せしめた。

三太郎「先導者が居れば、こんな場合には散米をして、災難除の祈禱をするのです。」

五九郎「天候と散米とどんな關係がありますす乎。」

三太郎「昔天孫が此所に降臨せられた際に、陰霧晦冥にして日月爲に光を失ひました。其時に二神顯はれ、禾千穂を取りて其穀子を散布せよと敎へられた。其言に從つた所が天色開朗直に晴天白日と成つた故に、玆を千穂之峰と呼んだのである。後世の人が雲霧に逢ふ毎に、其例に習ふのであるが、畢竟斯の如き地形の所は、氣象が

急變する故に、暫らく地上に伏して晴れるを待てば良いのです。然るに、無爲に待つて居ては時間の經過が待ち遠く、且つ不安の念が盛に起るから、適當の方法で心を外に移す事を講ずれば良いので、御祈禱の代りにこんな話をして居ても、同じ苦です。見たまへ、西南の風が出て來たから、もう晴れるのは間もない事です。」

五九郎「霰ふる霧島岳を險みと、草とりかねて妹が手を取る、と昔の人が詠んだのは、今の樣な場合かね。」

三太郎「成る程險い山で、草一本もないが、去りとて手を取るべき妹も居ないでない乎。殊にあの歌にあるのは杵島岳で霧島山でなく、阿蘇山系にある山です。」

五九郎「信ぜよ然らば救はれん、君の先程の論法から言へば其所に美人が居ると信じさへすれば良いので、美人の手を握つたつもりで、石でも握つて居れば良いでない乎。それが宗教家の主張する所でせう。信ずる者は幸なりき。」

斯の如き會話を續けて居る間に、天候が回復したから無事に馬之背越を下り、更に谷を越え枯草を分け、新燃山に登つた。格別記するに足るものもないが、舊噴火口の西北方なる、高さ約一丈の密林内にて道を失ひ、數回行き戻りして、漸く見透しの出來る地點に出て、火口壁に沿うて西側まで巡り、霧島溫泉を目的に山腹を飛び下り、小徑に沿うて行く事數丁にして、男女數名の一行に逢うた。其旅裝より判斷するに、彼等も亦溫泉に湯治に行く者であること明白であるのみならず、此一行は吾々が新燃山の山頂に在りし際に、東方なる小林町方面から大幡山を越えて來るのを、遙に目擊したのである。從て此一行に逢ふのは、我々が目的と反對の方向に進んで居る事を證明するのである。

五九郎「玆て一休みしよう。あの一行の後に附いて行けば、間違ひあるまいから餘程損をしたね。丸て反對の方に來て。」

三太郎「損も徳も有りはしまい。どうせ山を散歩しに來たのでありません乎。普ねく山峰の巍峨たるを經歷して諸の煩惱を拂ひ、岩上の苦の床には八苦の寒風に浴し、

曠野原上の草の沈には調伏難調の心馬を繫ぎ、身心の二行圓滿して理智不二の妙旨を觀ずるのが、山岳旅行の目的で有りません乎。」

五九郎「何時乎山伏に聞いたのを能く諳記して居るね。」

三太郎「入峰に順逆の二つあり、春の登山は順峰にて因に從ひ果に到り、上菩提を求め、自ら心を明かにするのが目的であるから、何所をどんなに歩いても差支ない譯ですよ。秋の登山は逆峰と言つて、果に從ひ因に向ひ、下衆生を化するのが目的で學生を引率して來た場合に、こんな風では責任を問はれるがね。」

五九郎「此地方の人間は餘程蠻的に出來て居るね。岩石峨々たる此險山を越えて、十里以上も旅行するのに、今の女などは足袋もはかずに素足に草履ですよ。其草履も指先が一寸程と、踵が二寸餘もはみだして居る。あれで能く足の裏を怪我せんのは不思議だね。」

三太郎「南洋の婦人などはビール瓶の碎片を一面に敷いた庭を、平氣で素足で草履もはかずに歩きますよ。」

五九郎「南洋の土人と一緒に見るのはひどいてない乎。」

三太郎「何れ昔は兄弟ですもの。南洋土人の傳說に依ると、悧巧な兄が船に乘つて日本に渡り、馬鹿な弟が島に殘つたのださうだから。」

霧島に來た序であるから大浪池を一週し、韓國岳に登つて見ると、道は七合目程から消えて仕舞つた。枝を折つたり、紙を結び附けたりしながら谷を涉り、峰を傳ひ、絕頂に達して見ると、霧島山系の最高峰で、且つ最も古いと云はるゝ舊火口の直徑は、三千二百尺、其四週の絕壁は頗る壯大で、突出せる岩の上に立ちて深き火口底を伺へば目が眩む樣な氣がする。

五九郎「日本を代表する高千穂よりも、韓國岳の方が高いのは少し變ですね。」

三太郎「外國崇拜の觀念が此所にも顯れて居るのです。昔から日本人は外國の方を尊敬したので、舶來を上等と見るのは現代人に限らないてす。」

こんな噺をしながら右足を火口の方にふんばり、上半身を少しく反對の方に傾けて、用事をして居ると、身體が急に動搖して噴火口に振り落されさうに感じた。

五九郎「地震だ〳〵、ぐづ〳〵して居ると命がありません。」

三太郎「地震です乎。何だか變だと思つて居ました。」

二人は夢中で山を下りて來たが、元來一定の道路が無い山を勝手に下つたのであるから、初の内は樹木も谷もなく自由に歩けたが、下るに從て林があり、左右の谷は次第に發達して、竟に目的の方向に達する事が出來ぬを知つた。止むを得ず折角降つた山を再び登り、其所から初に結び附けた紙片や枝折を頼りにして、無事に山麓に出て、霧島溫泉で疲れた肉體を休め、更に霧島神宮を參拜せんものと道を急いだ。

四十二　仙境異聞

霧島神宮は霧島山の西麓東襲山村にあり、境内附近は森林大樹欝蒼として晝猶暗く、人皇三十代欽明天皇の御宇に、慶胤と呼ぶ仙人が殿堂を造營したものであると傳へられて居る。山奥には今も猶仙境があり、神誘に逢うて其仙境に到り、仙人の敎を受けて來たと言ふ仙人之弟子が、信神者を集めて色々の話をして居る故に、仙境の噺を聞くも時に取つての一興であると思ひ、一寸仲間入りをして見る事に相談した。

仙人「山にて夜學をする時には、月夜木と言つて十五六町も離れて光つて見ゆる木があり、夫を細かに碎きて硝子の玉に入れて机上に於けば、夜光の珠の如く輝くから書見する事が出來ます。」

五九郎「光木なら到る所にあります。木や竹の根の腐つた物が光るので珍らしくはありますまい。けれどもあんな弱い光で書物が讀めます乎な。」

三太郎「我々は電燈の下で育つたから駄目だけれども、昔の人は雪の光や螢火、或

は線香一本で書見をしたと云ふから慣れゝば出來ない事もないさ。」

仙人「一つ實物を作つて御覽に入れませう。」

五九郎「今頃光木はありますまい。」

仙人「仙境には夏に限らずありますから探したら此邊でもありませう。」

彌次馬甲「仙人に月夜木で夜光の珠を作りて得意になる事も知れんが、我々凡夫はそんな物がなくとも、夜の用の辨ずる事が出來るから心配は入りません。」

仙人「夜光の珠なしに夜の用を辨ずると言ふのは、どうしますのです乎。」

彌次馬甲「苟しくも仙人たるものが夫位の事を知らんのです乎。產靈大神は我々人類を造りたまふ時に、身體の上部に兩眼を着けて晝の用を辨ぜしめ、身體の下部には睾丸を附けて夜の用を辨ぜしめたまうたので、誠に有難き次第であると私は毎日感謝して居ります。」

仙人「それでどんなにすれば夜の用が辨ぜられます乎。」

彌次馬甲「それを利用するには、眞闇な場所で褌をかゝげ、二本指の間にはさんで振りまはせば、用を辨ずる事が出來ます。別に珍らしい事ではなく、誰でも毎日實行して居る事です。」

仙人「それは僞でせう。私はまだ光つたのを見た事がありませんから。」

五九郎「振つて見た事が有ります乎。」

彌次馬甲「仙人のでも我々のと同じ筈だが、歳が若いから駄目かも知れません。」

仙人「そんな事でも年の功が有ります乎。」

五九郎「猫でも古くなれば、夜其毛を逆さに撫でると、光を放つ事は昔から知られて居ります。」

彌次馬甲「人間でも同じ事です。古くなつて、毛がはえてからでなくては光が出ません。」

さすがに仙人の弟子と名乘る者も獨り天狗と見えて、彌次馬に馬鹿にされて居る

のも知らずに、眞面目に應對して居る樣子がなか〳〵面白い。知らぬが佛とはこんな事かも知れん。

三太郎「仙境と言つても霧島山の樣な高山では、雷鳴などは毎日ある事と思ふが、恐ろしくは有りますまい乎。」

仙人「雷鳴を恐れぬ法が有ります。高山の絶頂に登り。穴を掘りて一晝夜徹夜し、雷神を祈り、其所の木の根と土塊とを持ち歸りて、之を紙に包み臍の上に載せて置けば、如何に烈しき雷鳴の折にも恐しくなく成ります。」

三太郎「高山の絶頂に徹夜が出來る程なら、雷鳴ぐらゐは何でもありますまい。」

五九郎「外に何乎、有益な法が有りませんです乎。」

仙人「忍術之法があります。赤裸體の女が股を開き陰門を出し、中腰にて腰の所に手を當て、立つて居る像を椿の木にて刻み、之を糞桶の中にさかさにつるし、一晝夜の後に取り出し、其陰門に溜まりたる水を掌に受けて、

ウンタラタラ、タフランソワカ

と唱へながら、顔一面に塗り附けるのです。此法を修業すれば、忍術の達人になります。」

五九郎「それは迚も我等に實行出來ません。もつと實行の出來る法が有りません乎」

仙人「火を防ぐ法が有ります。誰にでも出來る事で、

ほの〳〵とまこと朋石の神ならば
今こそ止めよ人丸の君

と云ふ歌を三度讀むだけです。」

五九郎「仙人など云ふ者は呑氣な者だね。人丸は火止(ひとま)ると同音だから、夫で火事を防げると信じて居るの乎ね。」

三太郎「それが日本人に固有な思想で、皇道大本教で謂ふ所の言靈術でせう。私の田舍では鮪(しび)と梅とを喰へば食當りをすると言ふが、つまり死人埋(しびとうめ)であるからで、何

時か刈田岳で聞いた生埋(いきうめ)なども同じ思想です。」

五九郎「尤も仙人と言つた所で消火器は知らず、ポンプも無し、別に火を消す方法を知るまいから、歌でも讀んでそれで火が防げると思つて居れば、安心が出來るだけ得をする勘定ですな。安心立命が宗教家の金科玉條だから。」

彌次馬乙「仙人ばかりではないよ。僧侶などは御札一枚で火事が防げると思つて居るのだから驚く。二三日前に火伏(ひぶせ)之御札を持て來て、施米を奉納しろと云ふから、火事を防ぐのなら警火組合か消防組に寄附すると言つたら、何と乎かんとか言ひ張るから、それでは姪賣屋が門前に開業するから、御祝儀を下さいと來たら、貴僧は寄附しますかつて反問したら、和尚さん赤くなつて怒つたね。つまらない防火の御札などくばらないで、眞面目な説教でもして、地方の青年を感化したら良いてない乎。青年が感服する丈の説教が出來ないなら、僧侶など廢業して肴屋にでもなつたら良いてない乎。そんなに怒るものでないよ。惡罵(をめ)之毒を歡喜受忍すること甘露を飲むが如くと、遺教經にも有りますよとやつたら、今度は青く成つて怒つたね。」

五九郎「思ひ切つて、逆さ説教をやつたものだね。」

彌次馬丙「火事を防ぐのならば、人丸之歌などよりは、婦人の腰卷を竹竿の先に附けて、振りまはすのが一番有效です。」

仙人「それて火事が防げます乎。仙境でも聞いた事がありませんがな。」

彌次馬甲「仙境には第一、婦人などは居ないてせう。」

彌次馬丙「仙境だつて女が居ない事があるまい。」

彌次馬甲「彖之仙人は、女を見ただけで、下界に墮落したと言ふ噺があるてない乎。」

三太郎「そんな事で火が防げる筈はありません。禁厭など云ふ者は、子供だましで唯如何とも爲すべき手段の盡きたる時に、氣休にやるのです。精神的に不安の念を去る手段に過ぎないものです。例へば火事の場合にして見た所て、防火の手段が盡きた際には、いくら氣をもんでも駄目だから、歌を詠むなり、腰卷を振りまはすな

りして、それで火が防げると安心して居れば、安心しただけが得な勘定でせう。どうせ燒けて仕舞ふのですから。」

五九郎「腰卷で防ぐのは火事では無いてすよ。火事の際に類燒するのは、火の子が飛んでくるからです。それですから、此火の子を防ぐ工夫をすれば、火事が防げる道理でありません乎。其所で或信神家の後家さんが、火之子を防ぐ方法を敎へて下さいと、辨天樣に願を掛けたのです。愈々滿願の日に近い晩になると、辨天樣が夢に顯はれて、それを防ぐには腰卷を堅く結んで置くに限ると御告げに成つたいてす。何の事はない、辨天樣も女てすから、火の子のヒとへとを聞き違へたのさ。」

彌次馬「成る程、そんな古事があるのてす乎。私は今迄本當に火の子が防げるものと思つて居たので、近所の火事には何時ても女房の腰卷を竹竿に結んて振りまはしたが、それては火事場で腰卷を解いた女房の方が、却て類燒の恐があつた譯てすな。」

日本人の信じて居るものは概ねこんな類のものて、眞面目て話す事も出來ん樣なものが多い。皇道大本敎の言靈術などは、腰卷の噺と同樣に、俗人には入り易すい議論であるが、日本語を離れて仕舞へば、全く無意味のものと成つて仕舞ふ故に、國境を越える事は不能である。

四十三　櫻　島

翌日は早朝出發し、櫻島見物の目的で鹿兒島に向つた。重富(しげとみ)驛の東北三里なる蒲生八幡の境內に、日本一の大樟がある。根元は百二十五尺四寸て、地上五尺の周圍七十五尺、高さは九十尺樹齡八百歲と云ふ說明札が建てて有る。

三太郎「北九州の推田驛にも、西南三里に本庄の大楠あり、地上五尺の所にて周圍七丈二尺、樹齡千八百餘歲と言ふ名所案內が有つたね。」

五九郎「太さから言へばこつちが一等だか、樹齡から言へば丸て段違ひだね。」

三太郎「樹齡などは良い加減てせうから、當てにならんさ。」

五九郎「太さと言つても、こんなに凹凸の有る幹では、同樣にあてにならんてはありませんか。周圍七十五尺と言へば、圓形と假定して直徑約二十五尺て凹んだ所を測定したら、二十尺もあるまい。全くの見掛け倒して、實用にはならんね。見たまへ、枝はあの通り拳を曲げた樣で、柱には成らず。板にも駄目。本來ならばこんな大木には鳥が巣を造る筈だのに、少しも鳥が集らない所を見ると、仕樣の無い惡木かも知れんよ。」

三太郎「其處が卽ち無用の用と云ふ點てせう。人間や鳥から見れば、無用の長物てあるが、此木自身から言へば、其無用の點が大用をなして、今まで千年も生存する事が出來たのてす。若し是が人間の役に立つ木てあつたら、遠くの昔に切られて仕舞ふ乎、左も無くんば果實を採られたり、枝を切られたり、或は皮をはがれたり、ひどい目に逢はされて、到底天壽を保つ事が出來ん筈です。」

五九郎「成る程、肉の甘い魚は直ぐ捕へられる道理だからね。左樣すれば、吾々なども、かうやつて呑氣に遊びまはる事の出來るのは、つまり社會に無用の人間てある證據てす乎ね。」

三太郎「勿論さ、若し役に立つ人物であつたら、朝から晩まで其所にも此所にも、引張り出されて、寢る暇も喰ふ暇も有りますまい。無能に生れたのが吾人の幸福さ、御蔭て天壽を保つ事が出來る筈です。」

雨の日に往復四里の田舍道は決して樂てないが、此の附近の山の景色は又一種特別て、支那畫を見る樣な趣があり、雨の日に最も適當して居た。重富驛から再び乘車して見ると、隣席の客が大聲で話し合つて居る有樣は、丸で喧嘩でもして居る樣に思はれたが、其實は普通の會話であつた。其言ふ事は少しも了解出來ん。

甲「ソッチン、ヨカニセサア、オマンサアノ、チゴサアモ、フト、ヲナイ、ヤスッロナア。」

乙「ハイ、ナアゴ、エヤゲモサンガ、ワヤ、ヤッパイ、ファンベイデ。」

甲「モウユナシタ、キユハ、イッペコッペ、サルッモシタヤ、スッタイ、ダレモシタ。」

乙「ミンナセイ、ヨロシユ、ギヤッタモシ。」

三太郎「亞弗利加の内地にても旅行した樣な氣がするね。」

五九郎「亞弗利加へ行つた事が有りますまい。」

三太郎「行つた事は無いが、亞細亞や歐羅巴なら、話す事が少しは了解出來るからね。」

地圖上では小さな島と思つてゐた櫻島でも、汽車の窓から眺めるとなか〳〵大きい。富士山ほどもある樣な感じがする。細川幽齋は

古昔(むかしへ)に誰乎言ひけん櫻島
　筑紫の海に富士を浮かして

と詠んで居るが、主觀的にだけ物を判斷するならば、富士山よりも櫻島の方が大きいと言ふ議論が成り立つかも知れん。鹿兒島市から眺めると、今猶白烟の所々に昇るのが見える。船を備ひ袴腰を指して漕いで見ると、海上の一里は案外に遠い。

案内者「大正三年一月五日午前十時五十二分三十秒に稍急性なる微震を感じたのが始でありまして、八日午前二時二十分には霧島山の鳴動から續いて、地震次第に頻發し、十一日より十二日に渉りて一晝夜未滿内に總計四百十七回の地震を算したが、同日午前八時頃櫻島御岳の西側に於て雲霧狀の白雲立ち昇り、同九時十分南岳の頂上よりも同樣の白煙を見、十時五分頃海拔千二三百尺の谷間から一團の黑烟顯はれ、一時間の後に閃光の輝くを見ると同時に、汽車の走る如き音響を聞き、午前十一時には黑烟約一萬尺の高天に冲し、煙の間に電光の閃くを認め、約十分間を經て市内に灰を降らし。十一時三十分頃より盛に岩石の落下するを見ました。午後二時半には全島黑烟に包まれ、鳴響は次第に爆聲と變じ、午後六時二十九分大地震襲來し、建物倒れ人畜にも死傷者を生じた樣な次第です。」

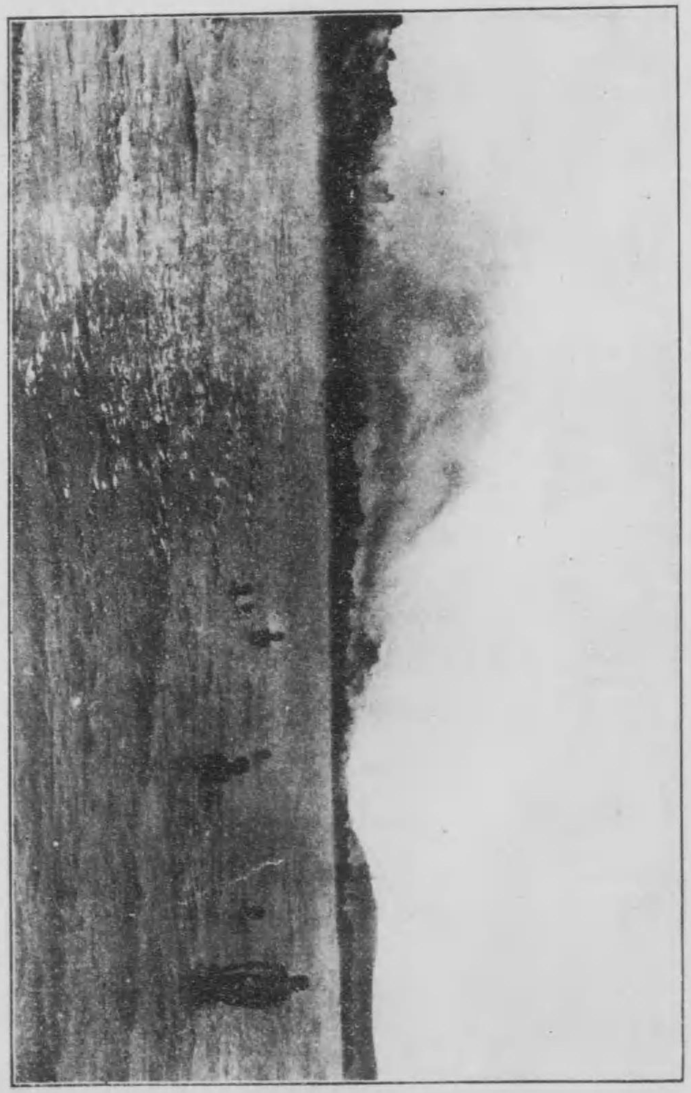
三太郎「雷に頭はたかれ地震とて、尻つねらるゝ天の御叱と言ふ所ですね。」

五九郎「最初は寄集て世直を唱へ、狼須桑原線香に到る。

婆母は黄聲にて念佛申し、祖父は青顔で神を祈て畏る。百性は鍬を離て皆藪に入り、船頭は船を捨て獨塘に入る。天地震動仕樣無し、上下騒動途方に暮る。

と云ふのは、其際の實景でしたらう。」

案内者「そんな呑氣なものではありません。翌日は火柱猛然として天に聳えて火の雨を降らし、山腹からは熔岩流出して火之川となり、電光縱横に閃めき、其光景は壯絶慘絶を極め、宗教家の所謂世界之終が來た乎と思はれました。十四日には前日來流れ出でた熔岩が、城山卽ち袴腰の上方約五丁位の所まで押出し。幅員約二十丁、厚さは數十尺、地上の萬物を一嘗にせんとして居る、二十日には城山を壓倒し、更に西方十町餘の沖合まで押し出し、御覽の通り恰も龍が海から山へ登る樣な形に見えるが、其時の熔岩で、城山の右にあつた鳥島が櫻島に連結せられ、途中に白烟の



第八四圖　櫻島噴火に伴入中変てし熱水海し出突に中海岩熔

（照參頁〇四四）

昇つて居るのは、熔岩の内部が未だに冷却せない證據です。雨の後には殊の外に多く昇りますが、烟では無く實は水蒸氣です。」

其内に船は赤生原に着いたので上陸し、直に登山した。引平附近なる噴火口の上から流出した熔岩を眺望して居ると、嘗て北氷洋上スピッツベルグ島に於て氷河を探檢した時が思ひ出される。彼は白く、是は黑く、其色こそ反對だが、壯觀に於ては好一對で、白龍や黑龍が山奥から飛び出し、海水を一飲みに飲み干す樣な景である。龍には逆鱗があると聞いて居るが、熔岩の流れを見ると、其表面に龜裂を生じ、冷却するに從つて破碎せる岩片は、逆鱗の如くに其尖端を突き出し、一見慄然として恐怖の念を禁ずる能はざるものがある。

案内者「今見てさへもあんな恐ろしい形をして居る程です。是が眞紅に燒けて、途中の凡てを丸呑にしながら、山を下りて來る時の光景は、其恐しい事話には盡されません。」

五九郎「女の腰卷で防げない乎ね。」

三太郎「火の子てないから駄目さ。霧島山の仙人なら人丸の歌でも讀んで見物して居る乎も知れんが。」

案内者「いくら仙人でも火山には駄目です。霧島山は櫻島の前年に爆發を始め、第三回の爆發後四日で櫻島が大噴火をしたのです。」

五九郎「何と言つても對岸の火事ですから、高見の見物が出來たでせう。」

案内者「對岸と言つた所で、唯の火事とは違ひ、天からは灰や石が降り、地は大振動をするのですから、鹿兒島は全くの修羅場でした。現に鍋山の方面から押出した熔岩は、有村溫泉を始め、瀨戸、脇等の村落を埋め、海峽を越えて大隅まで達し、今では櫻島も有名無實で、櫻半島と改名せんければならん樣な次第ですから、城山の方に押し寄せた熔岩が、海に飛び出した時には、慥に鹿兒島まで來るものと思つた程です。」

三太郎「兎に角、我日本國の領土が、夫だけ擴張したのであるから、結構な事です。」

五九郎「神代の記錄にある、神が國土を產んだと言ふのは、つまり、地震や噴火作用で、海中に島嶼が生れ出た事實を語るに過ぎないのです。地質學者の調査に依ると、九州が眞先に生れ、次に四國と云ふ順序で、東北などは遙に後世の產です。從て日本の國土としては、九州は長男で東北は天子の樣なものです。」

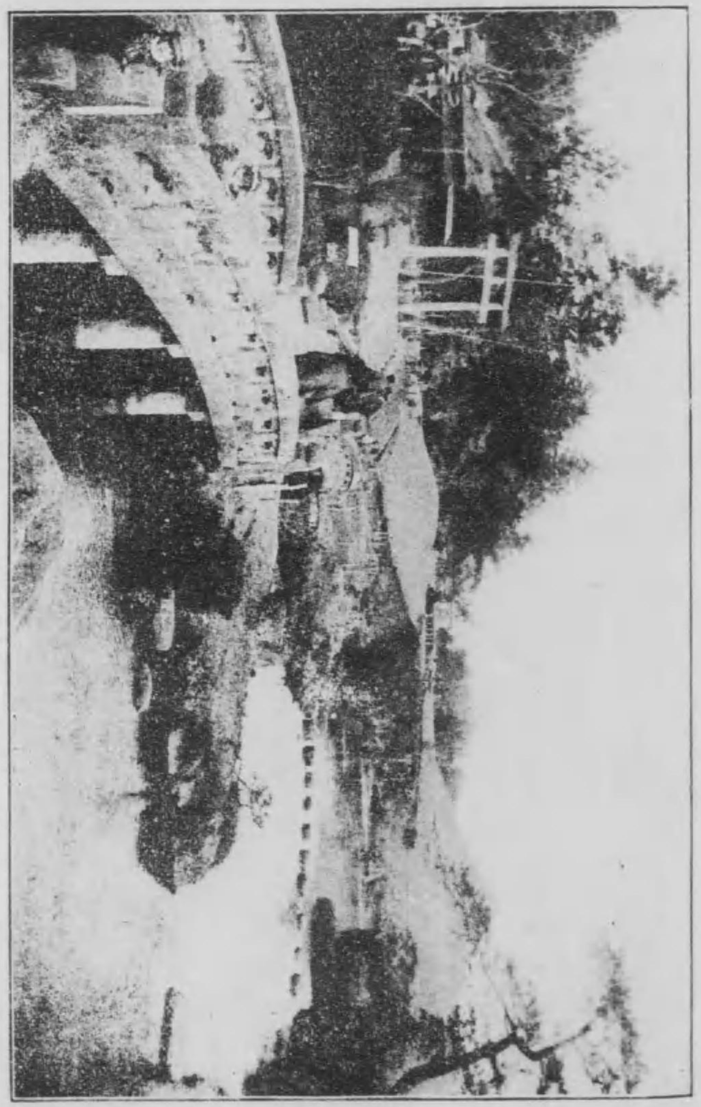
案内者「神代の事は私共にわかりませんが、歷史以後にも當地方では、盛に島が生れました記錄があります。例へば百四十年前、卽ち安永八年十月十四日には、櫻島の東北に當り約三町の沖合に、南北五十七間東北五十間高さ一間半の島が生れましたが、此長男は間もなく夭死しました。」

五九郎「島が夭死したと云ふのは、何の事です乎。」

案内者「再び水面下に隱れて仕舞つたのです。二男は其東方一町十六間の所に生れ、猪子（ゐのこ）島と言ひます。翌月六日には中之島が生れ、十二月九日には硫黃島が生れまし

た。翌年の四月八日には双子が生れ、五月一日には連續して一個となり、只今では新島或は燃島と言つて居ります。更に六月十一日、九月二日、十月十三日に各一個の島が生れたが、後に三島が合體して泥島となつたが、其附近では殊に澤山の魚が釣れるから、漁人は惠美須島と呼んで居ります。此島が櫻島に一番近く、一番大きいのは燃島です。」

我々がこんな噺を續けて居る間に、同行の人夫は退屈さうに煙草を飲みながら、ぼんやり海や空を眺めて居る。煙草に火を附けるのを見ると、マッチをする樣子がない。注目して居ると、煙管を地面にさし込んで火を附けた。是は面白しと早速人夫の傍に行つて見ると、山腹を上から下へ掛けて一條の龜裂があり、幅は一尺内外に過ぎんが、裂口の岩石は暗赤色で、多少白味を帶んで居る。近寄れば少し暖氣を感ずるに止まり、格別登山者の注目を引かぬけれども、試に古草履を其内部に投入して見ると、直に眞黑に炭化して仕舞ふ。恐らく二三尺の内部は赤熱の狀態にある



泉質の春前水　（出發頁五四四）　圖九四第

乎と推察せられた。

四十四　阿蘇谷

浮雲に乘じて櫻島を飛び出し、霧島山系を越え、球磨、八代、臼杵の山地を後に、阿蘇山系の高岳を望んで飛び行けば、左手に空漠たる熊本平原擴がり、其西方に當りて、夕陽に輝く一點がある。注目して視ると、熊本市の郊外なる水善境内、出水神社の神泉であつた。

五九郎「火と水とは共に人生に缺くべからざる要素であるが、火之崇拜は到る所に實現せられて居るに係らず、火が神として祭られて居る例は甚だ尠いですね。早い話が九州にした所で、霧島神宮や阿蘇神社を始めとして、凡て其起源は火山の靈を祀りたるものであつて、水之靈を祀りたるものは、恐らく此所の出水神社位なものて有るまい乎。」

三太郎「左樣乎も知れんね。人類に必要なる點から言へば、火よりも水の方が價値あるものであるけれども、元來人類が神として崇拜して居る者には、其恩に感じて神と尊敬したものと、其威を恐れて神と拜したものとの二種類あります。假に之を恩神、威神と命名すれば、太陽は恩神であるが、雷や火山、風などの神は、凡て威神です。火を祀るのは、燧石を祀つた場合は恩を感謝するのであるが、其他の場合は火の有難味を知つた爲でなく、其猛烈なる災難を恐れ、之に降伏した結果です。抵抗する力が盡きたから、之を神と崇拜して、其憐みを乞ふのです。日本には火山が多く、往々慘害を蒙らすので、火之神が非常に多いけれど、洪水の害は昔は稀であつたから、水之神は殆んど國家的に祀られてありません。此所の出水神社などは恩神の一種で、太陽と同じ種類に屬するものです。尤、支那では大洪水を起して國家に致命傷を與へ、禹などは治水の功に依て天子と成つた程であるから、江河や楊子江などは何れも神として尊敬されて居ります。日本の内でも、小範圍で言へば、溺死したり、身投をする樣な所は祀られて居ります。要するに、人類は恩に感ずる事は稀であるが、威に屈する事は早いと言ふ事實が、神社の種類に依て明示されて居ります。」

こんな噺をして居る内に南郷谷に出て、湯之谷に着陸した。古來阿蘇に於ける有名な溫泉場であると聞いて來たが、唯一軒だけある宿屋は、今日大掃除最中である。徳川時代から押入に押し込めて置いた乎と思はれる古器物が、庭前に連び出さ〻、家族一同上を下へと騷いで居る。浴場はと言へば、それから五六町も離れた場所で、脚袢でも着けなければ歩けぬ程の惡路を行き、倒れかゝつた門を入りて見ると、老若男女の有象無象共が、芋を洗ふ如くに混浴して居る。見た丈で嫌になつたから、入浴は中止として、附近の山を散歩して、宿に歸り見れば、六疊の座敷に相客が二人も出來て居た。山中の一軒屋であるから、無理もない。庭前には浴客が群集して居る。小風呂敷を手にして居る婦人が白米を一升下さいと言へば、徳利を懐中から出して酒を三合買つて行く若者があり、油揚を二つ手づかみにして歸る老人も居る。

ランプが暗いので、食事濟み次第寢に就き、翌日は早朝出發した。

三太郎「阿蘇は世界最大の火山と聞いて居るが、格別の高山ではなささうですね。」

五九郎「無論高山ではありません。一番高い高岳でも海拔五千三百餘尺に過ぎないのですもの、地質學者の說に從へば、昔は富士山以上であつたが、餘りに熔岩を流し出したので、內部に空隙を生じ、山體の重量に堪へずして陷沒し、大火口を形成した。其火口の直徑が東西四里、南北六里を算するので、世界第一と言ふのです。」

相客甲「阿蘇之火口はいくら大きいと言つても、そんなに有りません。私は每年參詣に登りますが、噴火口の週廻は一里乎、多くて一里半ほどです。」

五九郎「それは現在の噴火口です。私の言つたのは昔の噴火の事で、今我々の居る此邊は勿論のこと、南鄕谷も阿蘇谷も、凡て昔の噴火口の內部であつて、南は大矢峠から北は遠目鼻に掛けて、屛風を立て廻した如く二三千尺の絕壁が屹立して見ゆるのは、凡て舊火口壁です。現在の火山は其舊火口內に出來た火口岳で、夫が根子岳、中岳、高岳、往生岳、杵島岳などと、澤山の山に分列して居り、貴方の云はれるのは、其中岳の手前にある今の噴火口の事でせう。」

相客乙「私が老人から聞いた噺では、健磐龍命（たけいわたつのみこと）が阿蘇南鄕を見給ひし時に湖水を成して居たから、之を乾さんと思ひ、二重峠の所を蹴飛ばしたけれども、山が二重になり居る爲に成功せず、其後數鹿流山を蹴飛ばされたので、白川、黑川の二流となり、水が流れて行つたと云ふ事です。」

五九郎「昔は湖水で有つた時代も有る筈です。現に杓之木附近に、灰泥層が火山岩地を蔽うて水平に重なり居る所が有ります。畢竟、火山が陷落した後に雨水が溜りて湖水となり、夫が更に立野附近の火口瀨が切り開かれて、現今の樣に村落が出來たものでせう。」

相客甲「湯之谷溫泉は丸で蜂之巢の如く、所々に孔から白烟が噴出して居ますが、明治十四年四月十八日には、現今の泉源より三十間程西にあたり、突然に瓦斯の爆

裂あり、一時は慘憺たる光景を呈したものです。」

右に烏帽子岳、左に杵島岳を眺めて進み、海拔三千九百尺ばかりの地點に達した時、行手が急に雲霧に鎖されて、天地晦冥、是は不思議の事よと熟視すれば、凹みたる平地の岸に立つて居た。是が卽ち千里ヶ濱である。是を右手に見て濱邊を迂廻し、更に谷間を下り、少しく登つた所に本堂がある。其所から奥之院に向つて數百尺登れば噴火口に達する。火口の附近に到れば、風向我に利あらず、突然烟に襲はれた爲に、殆んど窒息せんばかりに苦んだが、暫時にして烟は對岸に向つた。火口壁の西側に立つて見ると、五百尺内外の絶壁内に、左右の方向に竝んだ幾つ乎の活動點があり、濃色の泥土が沸騰して居る。

三太郎「舊記に依れば、阿蘇靈池は南中北の三個あり。北なるは健磐龍命の神池で中なるは阿蘇比咩命の神池であるとあるから、大昔より分かれて居つたものと推察せられますが、恐しい者を神とするならば、此所を崇拜せずには居られますまい。」

第五〇圖　（明治四〇五年）　日本火山新誌　阿蘇

相客甲「阿蘇は十二官健磐龍命之祠にして、十一面現身說法之靈場であり、峯は八德之水を湛へ池は五色之浪を疊む仙窟之山でありまして補陀落山に象れる……。」

五九郎「阿蘇は立派な世界一の日本式火山です。何も佛敎にかぶれて、補陀落山に似て居るの、何のと言ふ必要が有りません。外國の山に似て居る事が何で名譽になります乎？」

三太郎「近頃の青年でも、折角日本獨特の高山にアルプスなど云ふ名を附けて、喜んで居るから、佛敎家ばかりを罵るのは無理です。」

相客乙「今を去る事千百二十三年以前に、神靈池が二十餘丈減水した爲に、全國の寺々に三日間の齋戒讀經並に悔過の詔勅を下され、其後に再び二十餘丈減水した際には、從四位上を授けられ、更に四十餘丈減水した際に、從三位に昇叙し、貞觀六年の破裂には、正二位に進み、今では正一位に成つて居りますさうです。」

五九郎「つまり、阿蘇山は位を昇せて貰ひ度くなると、不穩の擧動に出づるのです

乎。あきれた神樣ですね。今度も亦少し荒れ出した樣子だが、正一位以上は昇れまいてない乎。」

三太郎「正一位の上は從靈位。それから正靈位とするさ。」

五九郎「それでも亦不穩の兆が見えたら。」

三太郎「從無位、正無位とするさ。無位無冠は最上であると云ふ事が誰れにも知れる樣に成りませう。數だつて非常に多くなれば無數と言ふでせう。それだから一番上の者を正無位とするのが正當さ。」

五九郎「一體少し活動したり、不穩の樣子が有つたりすると、位や勳章などを與へて、平安を祈るのは日本ばかりでない乎ね。」

三太郎「人間でも神樣でも虛榮心に變りはないから、神樣が不穩の擧動に出て位を貰ふなら、小學校の先生なども神樣の眞似をするのは當然だね。」

五九郎「夫が卽ち神社崇拜の生きた手本と言ふものさ。然るに、現今の敎員連は、政府で折角神社崇拜を奬勵しても、兎角無事平穩に暮して居るから、待遇が改良されないのだよ。」

相客甲「敎員連は犧牲的精神が有るからね。」

相客乙「能く何乎と言ふと、犧牲的精神を養へと言ふのが當局者の言草だが、それほど犧牲的精神が尊いものならば、一つ貴族が平民の犧牲に成り、富豪が貧民の犧牲になつて、社會を改造しても良いでない乎ね。」

五九郎「さうすると、貴族や富豪が賞められる事に成つて氣之毒だから、成るべく平民や貧民に名譽を讓る考で、自分等は犧牲に成らないのさ。」

相客甲「犧牲と言ふのは下の者が上の方に對して奉公する事で、富豪が貧民の爲に財產を投ずるのは慈善事業と云ふものです。」

相客乙「富豪が貧民の爲に金錢を出すのは慈善で、貧民が富豪の爲に出すのが當然乎な。」

三太郎「貧民が富豪の爲に金錢を出す場合などは有りますまい。」

相客乙「一寸見ると無い樣に見えるが、其實は年中出して居るのです。早い話が汽車にした所て、一等車を運轉する費用は一等客の乘車賃では不足です。三等客から取つた金て補充するのは、明かに貧民の金錢を富豪が使用するのでありません乎。」

三太郎「それは特別の例です。一般の社會事業は凡て富豪が非常な税金を負擔して、貧民は僅に名ばかりの税を出して居る者です。」

相客乙「貴殿方は出す方面からばかり考へるから駄目です。其税金が誰の利益の爲に使用される乎を考へて見なさい。丁度茲に茶屋があるから、議論よりも實際を御目にかけませう。私は富豪の積りて大奮發して金七十錢を出すから、貴殿方は貧民の役に廻り一人前十錢宛出して下さい、合計金一圓に成りました。宜しう御座いますす乎。姉さん其ウキスキーを下さい。」

五九郎「それは不都合です。我々から集めた金てそんなものを買つて、自分獨りて飲むと言ふ法はあるまい。」

相客乙「何が不都合てす。貴殿方に飲ませないと言はんてす。御飲み下さいとすゝめても皆さんが下戸て飲めないのてありません乎。」

相客甲「我々の飲めないものを勝手に買ふのは、不公平てありません乎。」

相客乙「何が不公平なもの乎。私は多額納税者で、君等は貧民だから、豫算執行の決議權は私に屬します。或は市町村制に依つたとしても、私は一人で三分之二以上を負擔して居るから、一級議員も二級議員も私が出します。假に三級議員が反對した所て、小數だからつまり私の考一つて決定する筈てせう。つまり其決議の手續を省略した點てす。」

三太郎「左樣云はれて見れば止むを得ませんな。現今の社會組織はそんな物かね。」

相客乙「甘黨は可愛想てすから、一つ慈善心を起して十錢あげませう。ミルクキャラメルても買つて三人て分けたまへ。是は私から諸君へ進上するのてすから、御禮

を申して喰べるんですぞ。」

坊中に出て、阿蘇山西巖殿寺を詣て、官地に阿蘇神社を拜し、内之牧溫泉に勞を慰め、湯山を巡りて絶壁に沿へる新道を登り、海拔三千一百餘尺の遠見ヶ鼻に腰を下せば阿蘇谷は足下に開展し、猫岳以下阿蘇の諸峰は或は雲に隱れ、若しくは雲を吐き、之を圍める火口壁は、佛敎徒の宇宙觀に現はれる鐵圍山を連想せしむるに足るものがある。

四十五　羅漢寺

遠見ヶ鼻を出發し、膝栗毛に鞭をあて、山を登り谷を涉り、北へ北へと急いだが、平凡なる岡陵少しも旅情を慰むるに足るものがない。馬場や宮原を過ぎる頃は櫻の花盛りで、奴留湯（ぬるゆ）は溫泉場と言ひながら、汽車も通はぬ山奥の事とて、文明の風も此處までは吹き來らず、共同浴場の掲示板には、浴槽内に唾を吐くべからずと云ふ禁制の個條があるのには驚いた。

五九郎「通拔無用と書いて有つたら、此所に拔道ありと讀み、小便無用と云ふ張札を見たら、小便するに適當な場所が此所に在ると直感するのが普通ではあるまい乎。」

三太郎「それだから、墮胎藥の廣告には飲むなと書いて置くのさ。禮儀三百威儀三千、立派な條文の完備して居る國は、それだけ國民が惡い證據です。例へば寺院や殿堂の室内に小便無用の張札が無いのは、小便するも差支なしと言ふ意味ではない。其處に小便する程の馬鹿が居ないから、張札の必要を認めないのだ。事實が有つて初て之に相當する規則の出來るのが順序です。」

五九郎「それでは、此地方の浴客は湯槽の中に唾を吐くのですか。」

三太郎「いくら九州人が蠻的でも、自分の入浴して居る湯に唾を吐く馬鹿は居まい。」

五九郎「けれども、其掲示板にあんな禁制が出て居るのを見ると、今君の主張した論法から言へば、唾を吐く者が有るから、禁止する規則が出來た筈でありませんか。」

山續きてはあるが、大分縣下に入れば空氣俄に寒冷となり、濃霧四方を鎖ざして又も天地晦冥の狀況を實現した。降るに從て霧晴れ、嵯峩たる奇峯は行手に現はれ、玖珠川を渉り森町を過ぐれば、間もなく新耶馬溪で、奇巖怪石峰に充ち、天狗橋、仙手岩、坂之上、茄子岩、有らゆる名所が散在して居る。山移川は佳景に乏しいけれども、山國川に沿うて下れば、山水之景が具備して居る。山陽筆捨ての古跡を訪ひ、羅漢寺を差して急いだ。

山國川を渉り、競秀峰の麓なる青之里に出て、右に折れ、耶馬橋を渡りて左に曲り、更に左の道を選んで進めば、トンネルがある。其上は卽ち古羅漢の名所であるが、今は登山する者も無いとの話で、唯天然の石橋のみが特に注目せられた。進む事三四丁にして、坂を登れば山門があり、羅漢護國禪寺と銘を打つてある。山門の左右なる仁王樣まで石像であるのが面白く、右手に茶屋があり、左手に道案內の建札がある。參詣道を登つて見ると、イボ地藏が立ち居り、次なる賽之河原は有名無實で、それより峻坂を過ぐれば、絕頂に彌勤菩薩が居る。四方の眺望雄大佳絕で茲から鐵銷に依て手之平返しを下り、天然石橋之下を潛り行けば、緣結地藏が居り、周圍之柵には紙が一面に結ばれて居る。

五九郎「紙を結べば結ぶの紙だから、言靈學上より緣結神になるが、地藏さんは神でなくて佛でありません乎。」

三太郎「戀は人を盲目にすると言ふから、神と佛の區別などは忘れたのでせう。」

五九郎「盲目と言へば、此所に座頭佛が澤山居るよ。盲目の佛さんは珍らしいね。」

三太郎「知らぬが佛と云ふから、世間を見ない方が早く佛に成れる乎も知れんさ。」

香雲閣の山門を入れば、左側に極樂撫犬（なぜぬ）があり、餘りに撫でられるので鼻などは失せて居る。愛するの餘りに甘やかして育てた子供は、丁年に達する頃には鼻が無くなると云ふ風刺かも知れん。無漏窟と言ふ岩屋には、五百羅漢が陳列され、中央正面に無上尊が座を占め、其前に自働御闍箱が有る。

三太郎「此寺の住職は餘程慾の皮が張つて居るね。」

五九郎「そんなに坊さんを悪口すると、地獄に行くよ、御闔箱を置くのは金利の爲でなく、衆生信者に御利益を授ける慈悲心から來て居ると解すべきものでせう。」

三太郎「御闔箱を置いてある事を評論するのではありません。其箱に一錢銅貨の大きいのを入れて下さいと書いて有るのが、如何にも慾が深いと云ふのです。近頃は世界戰爭で銅の値段が高く成つたと言つても、御闔が一本金一錢と言ふのなら、何も大きい銅貨を下さいなんて言はんでも、よささうに思ふがね。」

五九郎「それは君の誤解と云ふものです。坊さんが此處に坐つて居て、一本一錢で賣るならば、大きい銅貨でも小さい銅貨でもかまはんでせうけれども、自働機械ではさうは行かんです。機械は銅貨の重量で働くので、手形や證劵では働きません。政府でいくら一錢と銘を打つても、近頃の如き小さな銅貨では、此機械が承知せんのです。政府の力で人民を誤魔化す事が出來んのです。物價が騰貴したなんて言ふけれども、戰爭前の五厘銅貨同樣の物に、一錢と銘を打てば、一圓の物が二圓に成るのは、何も不思議は有りますまい。」

三太郎「して見ると、官吏や教員の方は御闔箱よりは餘程馬鹿なんですね。實質を減らされても、同じ樣に働いて居るから、兎も角一つ大きい銅貨を入れて引いて見よう乎。」

五九郎「引いて見よう乎、なんて云ふ不信心の徒が引いては駄目でせう。御籤を引かんと思ふ者は、先づ身を清め手を洗ひ、嗽をなし香を燒き誠心誠意で觀世音を念じ法華普門品三卷を讀誦し、次に正觀世音、十一面觀世音、千手觀世音、如意輪等の咒を各三百三十三返唱へて、三十三度禮拜し、御籤箱を三度頂戴しながら、謹んで經を按ず、曰く、念念疑を生ずる勿れ、觀世音淨聖、苦惱死厄に於て能く爲に依怙を作す、一切功德を具して、慈眼を以て衆生を視る、福聚の海無量なり。是故に應に頂禮すべし。今南贍部州大日本國の大馬鹿三太郎、今月今日百籤に依て以て其事

の疑惑を決せんと欲す。唯願くは哀愍して道場に降臨し、百頌の中に於て、若しくは吉。若しくは凶。其一を授與し、我が猶豫を決し玉へと願文を唱へて、御籤を引かなければ功德がないさうです。」

三太郎「そんな面倒な事は、只の一錢で賣つて居る大道御闕には不必要でせう。けれども、君が折角願文を讀んで呉れたから、それを私の物に代用して引きませう。やあ、第五十番が出た、吉とあるよ。」

五九郎「見せたまへ。成る程吉だね。有レ達宣三更變二重レ山逢二利政一前、途相偶、合財、祿保三享通」とあるよ。第一句は目的が達するから手段を變更してやりなほせと言ふのだ。一體君は何を希望して居るのです乎。」

三太郎「重山何と乎言ふ句は、我々の樣に山から山と歩き廻れば利益があると言ふの乎ね。鑛山師ならさう說明すべき所だが、それでは我々には不適當だ。いづれ山を重ぬれば出るとなるから、日本の如き狹き所にぐづ〳〵して居ないで、支那なり南米なりに出て行けば、出世すると言ふ事に解したら當る乎な。」

五九郎「玆に澤山先客が引いた御闕が刺してあるよ。大概吉で凶と言ふのは滅多に無いね。」

三太郎「それは面白い。一つ統計を取りて見玉へ。」

五九郎「讀み上げるよ。吉、小吉、凶、凶、大吉、末吉、吉、吉、小吉、凶、……。」

三太郎「よろしい。それで丁度三十枚てす。其內凶が十枚に、吉は大吉、小吉、凡て合せて二十枚あります。つまり、一と二との割合です。」

五九郎「一番から百番まで並べて見ようでない乎。其方が朋暗です。」

根氣好く古い御闕を調べて見ると。百本の內に大吉と云ふのが十七本、吉が三十五本、小吉と半吉が共に五本て、末吉が六本に、小吉と云ふのが二本あり。殘り三十本は凶て有つた。つまり凶が三十本て、吉の字の附いたのは合計七十本てある。

三太郎「是ては、凶と吉とが三と七との割合になるから、三十本の內には、凶九本

吉二十一本出る筈だね。從て此處にあつたのは、凶が一本だけ多く出て居るね。」

五九郎「無限に多く引けば、三と七との割合になると言ふだけですから、三十回引いたので、凶が一回ぐらゐ多く出ても不思議でないさ。公算論で云ふ偏差と云ふ現象でね。兎に角、凶を少くして吉を多くして置くことは宗教家も商賣上手だね。實際社會では、吉より凶の方が多い樣に思はれるのに。」

三太郎「俗人を誤魔化して、其歡心を買ふ手段に過ぎんさ。凶が餘りに多く出ると其所の御闇を引かなくなりますからな。醫者でも同じ事て、餘程惡い病氣でも、病人の機嫌取りに、經過は良い方ですと云ふ方でせう。さうてないと、病人が來なくなるからね。何と言つた所で、雨が降る日にも好い天氣ですと言はんければ、承知しない日本人ですからね。」

五九郎「さう言へば、何時乎の天長節に、中央氣象臺で雨模樣ありと云ふ天氣豫報を出したら、不忠だと乎、不敬だと乎言つて、議場で質問した國會議員が有つたと言ふてはない乎。あきれたものだね。」

三太郎「德川時代の教育を受けた人間の忠君思想はそんなものなんてせう。天長節は芽出度日であるから、假令降雨が慥であつても、今日は上晴天だと言ふのが、忠臣の行てあると考へて居るのでせう。支那の歴史などを讀んて見ると、散々に敗戰して、直ぐ城下に敵が迫つて居るに關らず、皇軍大勝利と奏して祝宴を開き、宴會半に捕虜となつた忠臣さへありますからね。德川將軍の御前て、露國首府の文明開化が江戸以上であると談つた漂流者が、外國を賞める不忠者として、罰せられたさうですよ。」

五九郎「半吉と言へば二分之一が吉と言ふので、殘り二分之一は凶な筈てすね。して見れば、半吉と書いても半凶と書いても同じ事て、末吉と言へば、始と中と凶だから、三分二凶て、三分之一だけが吉な勘定ですから、小吉や末吉は名は吉の部類ても、實は凶でありませんか。」

三太郎「さうすれば、大吉と吉だけが眞の吉で、合計五十二本あり。半吉の五本は吉凶相半し、殘り四十三本は凶の勘定ですね。」

受付に行つて殿堂内の拜觀を乞うた。一人の小僧が案内役を務める。先づ摩尼殿中の階段廻り、卽ち地獄極樂の巡回から初まる。天然の岩窟を利用し、階段を造り上げ、途中を暗黑にして信者の心を不安ならしめた後に、通天橋を過ぎ眺望絶佳の高臺に導き、上天して極樂に入りたるの感を起さしめんとの企圖乎と推察せられた。

小僧「登りの階段は七つありまして、右の手摺りが盡きれば左に曲ります。少し登り坂に成つて居るが階段はありません。左手の岩屋は少し低く成つて居りますから御用心を願ひます。行き當りますと右に曲がり、階段は二つあります。次は少し下り坂でありますが、階段ではありません。此所から右手の板圍に附いて曲りまして、上る階段は十三あります。夫から左に折れて階段は三つ……。」

實に精しく暗記して居るが、餘りに淀みなく説明しながら早足で進む故に、初めての見物人には到底續き切れず、折角の説明も有害無益である。拜觀者が階段のない坂道を行く頃に、小僧は登りの階段が七つと言ひ、愈々階段を進みて中程まで來る頃に、小僧が階段では有りませんとやるから、踏み損ふ事になり、此うそつき小僧がと言ひたくなる。

小僧「抑も當山は千古の梵刹にして、人皇三十六代孝德天皇の御宇、大化元年の頃、法道仙人なる者あり。遠く印度より本邦に渡來し。諸國巡遊の折柄、蟠龍胴前の巖面に自然に孕出(はらみだ)したる彌陀の靈佛を拜し、閻浮檀金(えんぶかんごん)の觀音像を此靈窟に祀り、當山開闢の元祖となれり。峯巒の高さ巖窟の廣さ、天工自然の仙境なるが故に、今を去る五百七十餘年、圓龍照覺禪師は逆流建順と共力して、此處に五百羅漢の石像を安置し、爾來二十八代、臨濟宗を以て法統連續したりしが、慶長五年、鐵村玄策禪師當寺に錫を移されてより、改めて曹洞宗の禪窟となり、代々相續して今日に到るまで二十四代、寺格は隨意會にして小本山格たり……。」

五九郎「茲が指月庵乎、見晴らしの良い所だ。禪宗の坊主は山水明媚の靈峰を探がすのが上手だね。」

三太郎「安禪何ぞ山水を須んやなど云ふのは、天竺浪人の負け惜みに過ぎんので、禪を修むるにしても、こんな精舍に居れば早く悟りが開ける筈さ。居は心を移すと云ふから。」

凌雲閣か寶物館を見物したり、拜觀したり、鬼のミイラを見たり、末期の水の積りで靈洞水を飲んだ。逆流建順は、出生入死、一往來、朝遊二東土一暮還二天臺一。との一偈を殘して立ち去つたと聞いたが、我等とても一往來の旅烏（たびがらす）、見るだけ見てさつさと歸つて仕舞つた。

四十六　寫眞問答

北九州では地獄と疑獄が競爭をして居る。三日月地獄、今井地獄、照湯地獄、紺

第五圖　地獄海

（照參頁九六四）

屋地獄、海地獄、坊主地獄、鬼石地獄、血之池地獄、八幡疑獄、其他新に出來かゝつて居るのもある。死んでから地獄に落ちれば浮ぶ瀬がない故に、娑婆に居る間に一つ地獄見物をするのが安全第一と思はれたので、地獄巡りをやつて見た。流石は北九州だけに恐山とは事實なり、何所へ行つても入場料金五錢申受候と云ふ建札がある。地獄之沙汰も金次第と云ふ事は聞いて居たが、六道錢では足りない。百割に近い値上で、貧乏な亡者は地獄に落ちる事も出來ん、大正の聖代となつた。是ならば安心して貧乏に成れる。無一文で死ねば、地獄で入場謝絶とくるから、大手を振つて極樂に行ける。財産の多い者程此世でもあの世でも獄卒だちから歡迎される。途中に火男火賣神社があるから參詣して見ると、此所にも自働占箱が設けてある。

三太郎「此所の神主は氣が利いて居る。大きい一錢と書かないで、古い一錢銅貨と書いてある。同じ事ではあるが、大きいと書けば何となく慾が深い樣だが、古い銅貨と言へばさうでも無い。」

五九郎「丸い玉子も切りよで四角、物も言ひよで角が立つ。と云ふのはそれさ。今度は私が一本引いて見よう。二十八番半凶と出だよ。羅漢寺の御闔には半凶が無い筈だのに、つまり半吉の事だね。」

三太郎「あれは元三太郎の御闔で、此所とは流儀が違ふさ。」

五九郎「御闔にも流儀がある乎ね。梅が枝に來居る鶯春かけて、鳴けども未だ雪は降りつゝ。とあるよ。先のは佛敎で、今度は神道乎。始め苦しむは後に榮ゆる兆と知るべしだとさ。つまり時期尙早しと云ふ事だね。」

三太郎「それなら、つまり末吉と云ふ部類でせう。」

案内者「當社は延喜式内にありまする縣社で、其創立は千有六十年の昔でありますが、今より三百餘年前、後陽成天皇の朝に、當社の住職たる圓内坊が、性傲慾非道にして人倫を解せず、社領十二個村の百姓に對し、年貢米納入の際は、一升二合を以て一升となし、配下の末寺には八合を以て一升として拂ひ渡し、其殘りたる惡財を以て、高燥華麗善美を盡せる別莊を建て、晝夜酒色に耽り、其驕恣は王侯を凌ぐ程でありました。」

五九郎「獨り圓内坊のみでありますまい。それが宗敎家の好模範でせう。」

案内者「所が、或夜天地鳴動し山岳傾倒、黑煙天に漲り、其物凄きこと言語に絶するばかり、人皆生きた心地はなく逃げまはつたが、暫くして天晴れた後に見ると、然も高壯なる建物は見る影もなく、敷地は熱湯之池と化し、圓内坊は章魚坊主となりて、池中に慘死して居りました。其遺跡が此先にある本坊主地獄と云ふ所です。」

五九郎「紺屋地獄にも、何乎面白い由來があります乎。」

三太郎「紺屋の明後日七十五日と言つて、虚言を云ふのが專門だから、地獄に落るのでせう。」

五九郎「それでは八幡地獄と言ふのは。」

三太郎「知れた事さ。八幡疑獄で今頃は大入客止かも知れん。」

案内者「坊主地獄は大正六年八月十五日に、大小四十二個所から突然大噴煙し、今ても盛に活動して居ります。」

三太郎「近頃は坊主が益々墮落したから、地獄ても活動し初めたのでせう。」

五九郎「坊主地獄が二つもあつて、百姓町人の地獄が無いのは變ですね。」

案内者「何と言つても坊主の方は罪が深いから、それを先にするので、閻魔樣も百姓の方までは手が屆かぬさ。」

處々の地獄を見物して、鐵輪溫泉に到り一泊した。半囚の御閨は見事に的中し、折角見込を附けた旅館では玄關拂を喰つたが、始め苦むは後に榮ゆるの兆とあるので、其隣に行つて見ると、第一等の室が明いて居る。別府灣は眼下に展開し、朝景色は殊の外に宜しく、櫻は散りたれど、柳の綠は益々濃く、散り殘れる菜の花の間を散策し、午後紅丸に乘りて別府を解纜した。

左隣には三十四五歳の丸髷と、鼻先が眞赤な平家蟹に似た顏の男と座を占めて居る。見送の者が寫眞を持つて來て婦人に手渡した。

婦人「十一時に採つて、それでもよく間に合ひましたね。私は迚も駄目だとあきらめて居ましたのに。」

見送人「漸く一枚だけ出來たのです。是もまだ充分に燒けて無いから、成るべく日光にあてゝ下さいと、寫眞屋が云つて居ました。」

婦人「本當に長く寫つて居るのね。額がいやに廣くつて。」

見送人「眉をそつて居らつしやるからですよ。早く立てゝ御仕舞なさいな。」

見れば、昔風に眉をそつて、齒をそめて居るが、額は奥之院まで髮がなく、左右の頰はこけて、蜀山人に見せたならば、乘つた人より馬は丸顏と言ひさうな御面相である。

五九郎「寫眞は實物其儘寫るのでありますまい乎。人の顏が長く寫つたり、丸く採れたりするものでせう乎。」

三太郎「それは出來ない事もありますまい。一つパテントを取つては如何です。」

五九郎「長い顔を丸く寫し、丸い顔を長く寫す寫眞機の專賣特許です乎。出來ない事もないが、それでは寫眞機とは言へなくなるでせう。」

三太郎「名義などは何でも良いさ。兎に角、客の氣受が良ければ結構なので、それが現代式と言ふものでせう。阿彌陀樣の前で結婚式さへする大正の御代ですもの。」

五九郎「出來る事は簡單に出來ますがね。つまり、シリンドリカルレンズ一枚あれば充分なので、普通の寫眞機の前に此レンズを縱に置けば、平家蟹の顏が適當に長くなり、之を横に置けば馬の顏が丸くなる筈です。」

川太郎「名案だね、それなら寫眞機に限らず、一つ眼鏡を賣出しては如何です。」

五九郎「それも面白いね。細君の眼鏡には縱にはめれば、亭主が丸顏で外の男は凡て馬顏に見え、亭主の眼鏡には横にはめて置けば、細君だけが丸顏で外の女は凡て横廣い顏になるから、家庭圓滿に成るわけだね。」

右隣に六十前後の婆さんが居る。四十五六の商人風の男と意氣投合して、杯を擧げながら談り出した。

婆さん「金剛樣は本當に有難いです。昨日私が地獄巡りをして歸りましてから、神前に神酒を捧げる時、誤つて毛筋を一寸程左足の裏に刺し込んだから、早速御神酒で洗ひましたが、別に熱も出る樣子が無く、格別痛みもしません。全く金剛樣の御蔭です。」

男「そんな怪我をしない樣に、金剛樣が御守りになつて下されたら、よささうに思はれるがね。」

婆さん「其所が金剛樣の有難い思召です。私にこんな怪我をさして下さつたのは、私の信仰を試みる爲で御座いますので、怪我をしたからつて、直に醫者や藥の厄介になる樣では、まだ信心が足りない證據です。私は今度と云ふ今度、本當に金剛樣の有難い思召を知りました。」

と言ひながら、男がついてくれた冷の正宗を、コップで一杯ぐつと呑みほした。御神酒の御利益は忽に顯はれて、懸河の如き能辯、何時盡きる乎豫想もつかない。

五九郎「東京で今度春畫の展覽會があるね。歸りに見て行きませう乎。」

三太郎「馬鹿を言ひたまふな。東京の眞中でそんな會が許可される道理が無いでせう。」

五九郎「理窟と實際は違ふと世間で言ふからね。それに何時乎、不忍の池に延命地藏を出して置くのは、往來に春畫を掛けて置くよりもひどいと批評した學者があつたが、去りとて地藏樣を引込ます事も出來んから、公平を保つ爲に、春畫を掛ける事を許可したかも知れんさ。兎に角今日の新聞に、此通り廣告があるから間違ひありませんで。東京千住東洋美術會と云ふ名で、現代一流の大家揮毫としてある。」

三太郎「新聞を見せたまへ。是は春掛畫會と讀むので、春畫掛會と云ふのではありますまい。」

瀬戸内海の夜は次第に更けて、人も我も竟に眠つて仕舞つた。

四十七　御用船

米國のウイルソンが唱へた民族自決主義が、朝鮮人の頭に何と響いたもの乎。雨後の筍の如くに頭を上げて來た。内地の山野にも飽きたから、一つ對馬海峽を越えて彼岸に遊ぶも面白いと相談忽ち一決し、今度は滿鮮旅行と出掛けた。新聞を見ると天氣豫報には北東の風雨模樣ありとあるけれど、晴れ渡れる朝景色は何所を風が吹くと言ふ風に、平和な春の氣分を漂はして居る。停車場で知人に逢つたので、一寸ハルピン邊まで往くつもりですと云つたら、呆然自失の態であつた。多分滿洲邊まで行くのなら、親族知友見送りの者がある筈と思つたの乎も知れん。送迎者でプラットホームを埋めるのが習慣である、日本の社會から見れば、慥にそれに違ひない。兎に角、夕方に上野を下車して夕食を喰べる段になつたが、夜行で東京驛を立つ豫

定で時間が短いから、物價騰貴の今日、一舉兩得と、牛鍋をあてに二階の人となつた。

五九郎「今、廣小路の夜店で話して居た、チヤマガと言ふのは何の事でせう。」

三太郎「上州館林の見世物だと言ふから、茶釜の事でせう。」

五九郎「東京では標準語を使用すると云ふが、あてにならんね。」

三太郎「東京には東京の方言があるさ。大和言葉は大和地方の昔の方言ですからね。」

五九郎「東京人はいくら田畑を見た事がないからと言つても、葱と牛蒡を一所に見て居るなどはひどいね。」

三太郎「そんな馬鹿な事はあるまい。」

五九郎「有るまいと言つても、今現に次の室の客が牛蒡を注文したのに、葱を持つて來ましたもの。」

三太郎「可乎の間違ひてせう。萬一牛蒡を注文して葱を持つて來たら、今晩の會計は私が引受けます。」

五九郎「是は面白い。それなら私が注文して見よう。おい姉さん牛蒡二人前下さい。」

やがて女中が持つて來たのを見ると、眞白な葱を五分切りにした物である。

三太郎「姉さん、東京では葱の事を牛蒡を言ひます乎。」

女中「そんな事は御座いません。葱と牛蒡とでは丸で違ふでありません乎。」

三太郎「それでも、今御前が葱を持つて來たでありません乎。」

女中「只今五分を御二人さん分、注文されたのでせう。」

食事を濟まして、大急ぎで表に出で、電車に乘る積りで待つて居ると、來るのも來るのも滿員、稀に空いたのは行先が違つて居る。轉轍手に敎はつて、池之端に到り、更に待つ事暫くて、愈々乘つた頃には、既に四十分も空費して仕舞つた。

三太郎「東京は便利だと云ふが、三十分も歩けば行ける所に、四十分も待つて居て、電車に乘る樣では、少しも便利で無いね。」

五九郎「是だから、東京の人が朝から晩まで闘はしく暮らす事が出來るのさ。若し田舍なら、上野に下車すれば、ぶらりぶらり歩いて呑氣な歌でも唄ひながら、三十分もかゝれば東京驛まで着くてないか、それを東京では停車場前に立つて居て、電車の來るのを鵜の目で探がし、來たとなると、車臺の前に往つたり、後に走せたり一寸の暇もなく活動して、上野から東京驛まで、一時間も費す事が出來る勘定だからね。

三太郎「成るほど、此世の中を闘しく暮らすのには、良い方法ですね。」

五九郎「昔は豆腐屋へ半里と言へば、山中の一軒屋の噺であつたが、今の東京では、朝晩の勤めに二里も三里も通ふのですから闘しい筈でありませんか。一寸友人を訪問するにも、往復三里はある仕末ですからね。」

兎に角豫定の汽車で出發したが、途中の驛から中學時代の同窓が乘り込んで居るのに會し、古い噺や新しい話が色々と繰り返された。」

同窓「中學に居る頃は非常な評判であつた割合に、芳本君は發展しないね。今はどうして居ませう。」

五九郎「あの人の名は新聞などでも見た事がありませんね。」

同窓「仕事が仕事ですから、地方官などの樣に名が賣れないのは當然だが、友人間にもあまり噂に登らん樣ですね。」

三太郎「地方官と言へば、高岡は一兩年前知事に成つたが、軍隊の事で近頃迷惑して居ると言ふ噂です。」

同窓「地方官と軍隊との衝突ですか。」

五九郎「左樣では有りません。大演習の節に元帥や大將などの宿割を縣廳で世話したのだが、後になつて宿料を縣の方へ請求されて、そんな豫算がないので閉口して居ると云ふ事です。」

同窓「軍人が喰逃をしたんてす乎。まさか露西亞式に成つたわけでもあるまいが。」

五九郎「喰逃では有りませんがね。元帥や大將の宿料は金一圓九十五錢が規定の拂ひださうです。物價騰貴の今日、殊に玄關に幕を張つたり、門前に番兵を立たせたりして、他の客を追拂つて、一圓九十五錢では宿屋が立ち行く筈がないので、不足額を世話人たる縣廳に請求したのさ。」

彌次馬甲「そんな宿屋は非國民だね。」

三太郎「どつちが非國民だか知れたもので無いぞ。必しもサーベルを振りまはすだけが忠君愛國でもあるまいから。」

彌次馬乙「昨日の新聞で見ると、壯丁の徵兵忌避者は少いが、航空隊と乎、電信隊と乎、實利一方の職業的なのを志願する傾向があるさうです。」

三太郎「それなどは大に喜ぶべき現象でありません乎。今後の戰爭は川中島合戰やナポレオン時代のとは違ひますからね。槍や刀を上手に使ふ競爭では無く、新式の武器を利用する競爭です。村田銃をかついだ步兵が軍隊の中堅だなど思ふのは前世紀の軍人思想で、今日では技術家が重要なる位置を占めて居るのです。殊に航空隊の如きは、海に海軍あり、陸に陸軍ある如く、空中に航空軍ありて、此三者が三つ巴となつて活動すべきもので、航空隊を陸軍の一部隊として置くなどは、恰も德川時代に海軍を陸軍の一部に附屬させて居た樣なものです。新式の敎育を受けた人間は、誰でも是位の考はある故に、航空隊や電信隊などの技術隊に志願するのです。それを除隊後に利用が出來るから、技術隊に志願するなどと言ふ當局者の頭が問題でせう。」

其内に汽車は神戸驛に着いたので、其所から陸軍の御用船に乘り込んだ。御用船と言つても會社の船で、切符さへも買へば、船室のある限り誰でも乘れるのである。甲板上には澤山の軍人が竝んで居る。

甲「全員揃ひました乎。乘り遲れた者はありません乎。番號を附けて見たまへ。」

一、二、三、四、……二十四、二十五。

乙「二十五名缺員なし。全部揃ひました。終り。」

船は解纜した。軍人もシベリヤに行くのであるから、是に附いて行つたら諸事便利で面白からうと同行を願うた。暫らくすると、若い婦人が割り込んで來たので、一二の者は座席を譲つた。新聞を見て變な顔をして居る。自働車で名をあげた芳川鎌子の記事があるのであつた。

二十一番「姓名判斷から言へば、一體鎌子と言ふ名が惡いのだ。昔から鎌を掛けると言つて、男を引掛ける乎、男に掛けられる乎。何れにしても結果は同じ事である。」

十三番「室がせまいと小言を云ふくせに、席を與へた所を見ると、其所に居る人物なども引掛けさうだぞ。」

七番「軍隊内務書にも、一つ軍人は令嬢を重んずべしとあるてない乎。」

女「此所は軍隊の室なんです乎。私ちつとも知らずに、普通の客室乎と思つて來ました。御免下さい。」

と言ひながら、眞赤な顔して出て行つた。多分軍服を着けぬ吾々が居るから間違へたものと見える。暫らくすると、婆さんが子供を連れて入り込んだ。今度は、此所は軍用室だぞと叱り飛ばした。

四番「禮讓を重んずるならば、もう少し丁寧にしては如何なものでせう。」

七番「今のは令嬢で無いから、問題にならん。」

四番「仕樣の無い者ばかり揃つて居るな。」

十三番「軍人だつて色々あるさ。豫備にされたらどうしよう。會社に入らう乎。夫とも役場の書記にでもなど丶練兵しながら考へて居る者もあるだらうし、現役が終りさへすれば、家に歸りて大地主など丶、得意に待つて居るのもあるだらう……。」

十九番「大地主と言へば景氣が良いけれども、近頃の樣に小作人が横暴になつては、困るのは地主ばかりだ。私の所などは、十五年も二十年も前に、地代が只の樣な時の小作料を、今でも其儘にしてあり、物價騰貴したから、少し上げようとしても、小

作人のやつらは、なか〳〵承知しないて閉口だ。」

五番「それは君のやり様が下手だ。先づ作物の増收を圖り、夫れから小作料を上げれば、文句はない筈です。」

十九番「増收と言へば、米の價が騰貴したのだから、同じ十俵取れても收入は二倍にも三倍にも成つた勘定ですから、小作料を少し位上げても當然と思ふがな。」

三太郎「小作料は、一反歩金何圓と定めて有るのです乎。」

十九番「私の方は非常に地價が安いので、一反歩の小作料は、四斗俵で玄米一俵の割です。」

三太郎「玄米で收めるのなら、米價が三倍になれば小作料も三倍に上げたと同じ結果でありますまい乎。それに地租の方は米でなく金高で定まつて居るから、つまり地主が利益を得て居る筈でせう。」

四番「百姓も田だけでは將來危險ですから、私は少しづゝ株を買つて居ります。」

十二番「地方株では電氣事業が有望ですな。蠶絲業は現今の所では好景氣ですけれども、將來は必ず支那に移ります。關西は商業地となり、東北は工業地としての將來があります。」

八番「株を買ふのは一寸考へると危險の樣だが、決してそんなものではありません。私は何時でも當限を買つたら、それだけ必ず先を賣つて置きます。此筆法で行けば損する患は絶對にありません。」

五九郎「在鄕軍人がそれだけ商賣氣を出す樣では、日本の田舍も開けたものですが、その割合に本職の軍人は頭が舊式ですね。」

二十五番「進歩したのも退歩したのも色々ある筈さ。軍人ばかりでは無い、何の階級でも同じ事です。」

二十一番「私の聯隊區で、先月簡閲點呼が有つたが、其際の中佐殿などは、半白の老體と迄は行かんが、可なりの年輩にも關らず、頑健な者で、三時間ぶつとほしの檢

閲で、疲勞の色も見せずに、續いて學科の試問ですよ。」

中佐「強い兵と云ふのはどう云ふものを云ふ乎、甲言つて見い。」

甲「はい、身體を丈夫にします、終り。」

中佐「さうだ、身體が虛弱では軍人は駄目だ。けれども、それだけでは足らん。今度は乙言つて見ろ。」

乙「はい、軍紀を守る兵が卽ち強い兵であります。終り。」

中佐「善し〳〵、軍紀が一番大切なものだ。兵卒が三等症にかゝるのは、なぜ惡い乎。丙言つて見い。」

丙「はい、三等症が有りますと、戰場で萬一鐵砲傷を受けた場合に、直ぐ死にます。終り。」

中佐「それでよろしい。三等症は鐵砲に大毒であるから、戰場に出る場合には、殊に愼まんければいかん。」

五九郎「面白い敎育法だね。日本の軍人敎育はそれぐらゐの程度乎ね。なさけない次第では有るまい乎。」

二十一番「それはそれで良いとして、次に下士以上を特に中佐殿の間近に寄せての訓諭が聞きものでしたよ。」

中佐「近來甚だ怪しからん思想が日本に入り込んで來た。日本は國こそ小さいが、軍人には大和魂があるので、外國人が攻める事が出來ん。其所で彼等はデモクラシーと云ふものを考へ出した。是を日本に輸入して、日本の軍隊を內部から破滅させようとして居る。敵の謀に陷て、デモクラシーに引込まれる者は國賊であるぞ。若手の學者の說や、新聞雜誌などは、何れも信ずるに足らん。軍人は上官に絕對服從するのが、陛下に忠なる所以で、內務書を十分に了解して居れば、それで澤山だ。新しい雜誌などは見るべきものでない。判つた乎。今日の點呼は是で終り。」

五番「諸君、そんな野暮な話はやめにして、是から一つ飲まうではない乎。皇國の

興廢此一擧にあり。吾人は今や對馬海峽に入るのですぞ。」

滿堂一致の賛成で、此提案が可決せられ、忽ちコップが飛び、罐詰が踊り、追分が唄はれ、博多節が出た。

宇品こぎ出て玄海に入れば、船は新造でも、艫は古くとも、御前さん乘せなきや、動きあせぬ。

騷ぐ丈騷いだ後は、一人去り二人減り、ボーイが睡むさうに食卓を掃除して居る。

四十八　朝鮮奇談

早朝起き出でゝ甲板に登り見れば、夜來の雨名殘りなく晴れて、遙に釜山の燈火輝き、既にして港内に入れば、檢疫官來り、食事を濟まし、午後八時上陸。市内の見物に初まり、豪商福島增衛氏の向陽園に遊び、商業會議所に於て講話を拜聽し、午後三時發の汽車にて京城に向つた。

九番「先き程の話に依ると、朝鮮米の産額は千二百萬石で、少し改良すれば五六十萬石の增收は容易の事で、若し鮮人に麥や粟を喰はする事にすれば、大部分は内地に移出する事が出來ると云ふ事でしたが、さうなると、内地の米價が直に下落しませう。」

三太郎「朝鮮米は下等だと思つて居たが、今日天海樓で喰べた中飯ならば、上等ではない乎。」

八番「内地で鮮米と乎外米と乎言ふのは當てにならないので、鮮米や外米の内の上等な所は、内地米と稱して賣り、惡い部分丈を外米として賣るのです。」

十三番「商業會議所での講話中に、東北方面の下等米に鮮米と言ふ名を附けて賣るのは怪しからんと再三述べたが、東北米を下等米の代名詞の樣に謂ふのこそ、怪しからんでない乎ね。」

五九郎「東北米と云ふのも同じ論法でせう。庄内や村山地方から出る優良品は他の

名義で賣り、仙臺あたりの惡米のみを東北米と呼んで居るのさ。」

こんな噺をしながら窓の外を眺めて見ると、沿道の山と云ふ山は岩石疊々たるもので、亡國的地貌を遺憾なく示して居るが、合併以來殖林事業に勉めたと見えて、二三尺の松苗が規則正しく植え込まれて居る。野となく、山となく、土饅頭の凸起せる樣は、恰も鮫の皮を天眼鏡で見た乎の如き奇觀を呈して居る。此時に便所から歸つて來た一人が、次の室に朝鮮美人が乘り込んで居ると報告したので、四五の將校が早速探檢に出掛けた。

七番「今會話をやつて見たが、日本語を可なり知つて居て、なかなか話せる女だよ。」

十三番「服裝なども相當だから、良家の令嬢乎も知れん。」

八番「さうではない、妓生でせう。あんな若い年をして、卷煙草を平氣で吸つて居るもの。」

一番「妓生と云ふのは、あんなです乎。」

官　妓　第五二圖　（四九三頁參照）

二十一番「どうだ御意に召しましたら賣物ですもの、遠慮は入りませんよ。」

約二時間の後に、二十分程停車したので、プラットホームに出て散歩をし、次に改札口附近に行つて見ると、鮮人が大きな荷物を荷つたり、抱いたりして、押し合つて居り、中にはなぐり付けて先を爭ふ者も珍らしくない。暫くして再び發車した。

八番「諸君に報告すべき大事件があります。諸君が美人であると大騒ぎをした今の女が下車しましたが、其出て行く後から精細に檢査した結果に依ると、今のはチンバであります。チンバ美人が御意に召した方は誰です乎。」

五九郎「夫は觀察の錯誤と云ふものです。今の女は決してチンバでは有りません。立派に纒足した支那式の美人です。あれがチンバならば、北京の貴婦人連は全部チンバと言ふ事になります。」

其内に夜も次第に更けたので、室内は靜に成つたが、午前一時過ぎに大田驛から一人の朝鮮紳士が乘り込んだ。二三人を除いては大概眠つて居る。

十三番「もし〳〵、あなたは朝鮮の方ですね。京城までは何里ありませう。」

紳士「はい、京城までは三百……三十里……釜山から京城までの三分の一です。」

十三番「釜山から京城までは三百里ありますず乎。」

紳士「否、百里です。其三分の一ですから、三十里殘つて居ります。」

十三番「朝鮮の一里は幾何ですず乎。」

紳士「日本の七十町は朝鮮の十里です。」

十三番「夫れでは、日本の半分ですね。日本では三十六町が一里ですから。」

紳士「さうです。」

十三番「官妓と書いて、きいさんと讀むのですず乎。」

紳士「はあ……やはり、さうですな。」

十三番「なぜ官妓と言ふのですず乎。昔は皇后陛下の仕事をしたのですず乎。」

紳士「さうです。」

日本將校の質問が振るつて居るので、朝鮮紳士も開いた口が塞がらず、さうですの一點ばりで受止めて居る。陸軍中尉殿と日本流の教育を受けた朝鮮紳士との會話が是位であるから、下士卒と一般鮮人との間に意思の疏通が出來ないのは、當然の事とうなづかれた。

京城の南大門驛に下車したのは午前七時である。外氣は可なり寒い。兎に角汽車の窓硝子には氷が張つたのだ。先づ倭城臺に上りて京城全市を瞰望した。

案内者「右手に見ゆる大きな建物が宮城です。併合談判の際には、此臺上に大砲を据ゑ附けて、否と言へば、最初の一發をあの宮城に打ち放つ豫定であつたさうです。」

二十四番「右の方にあるのは何ですず乎。」

案内者「夫は總督府です。今其邊に行つて見ます。今日は不幸にして霧が多いので遠方は能く見えません。」

總督府の門前から鏤樓街に向ふ途中の左側に、警鐘を吊した梯子が建設されてあ

り、鐘の上を見ると、烏が巣を造つてゐる。

五九郎「朝鮮も併合以來太平無事だと見えるね。」

三太郎「騷動最中で商店が此通り店を閉ぢ、番兵が街の到る所に立つて居るのに、太平無事とは少し皮肉すぎるでありませんか乎。」

五九郎「天下の太平なるを歌つた詩に、刑鞭蒲朽螢空去、諫鼓苔深鳥不レ驚と言ふ句が有るでせう。非常の際に亂打すべき鐘の上に、烏が巣を構へて平氣で子を育てる事の出來るのは、何と言つても太平の證據でせう。」

案内者「確に左右です。世人は軍政で鮮人を壓伏すると乎何と乎惡評をするが、事實は此通り、德禽獸に及ぶ有樣で、鮮人は大に感謝すべき筈なのです。」

三太郎「非常の事があつても、知らん風をして警鐘を亂打しないのではありませんか乎。近頃は兎角に、臭いものには蓋をする主義が流行するからね。德禽獸に及ぶと言ふのは、先づ人類に德を施して、其御餘りが禽獸に及ぶ事を言ふので、米國婦人の樣に、有色人種を禽獸扱にしながら、犬や猫をいくら大切にした所で、德禽獸に及ぶとは言へません。此及ぶと云ふ一字に、非常な意味があるのです。」

二十四番「米國と言へば、近頃醫學研究の爲に、犬や兎を殺すのは不仁の甚しきものである故に、之が禁止を婦人團隊から建議したさうですね。」

二十一番「其くせ彼等は、勝手に私刑を行つて、黑人を慘殺するのを、何とも思はないのだから驚くよ。」

一番「黑人が白人の女を犯したからと云ふのなら、罪は黑人にある筈でせう。」

五九郎「左樣は行きません。犯罪者を捕へる事が出來ない爲に、誰彼の差別なく黑人を殺すなどは、野蠻極る行爲です。例へば、米國宣教師の一人が、今回の騷動に關係あるの故に、宣教師を片つぱしから獄に下したらどうです。」

二十一番「夫は大賛成です。夫が米國流と云ふものであるから、少くとも米國人に對しては結構です。否獨り米國人と限りません。白人はどれもこれも同じ事で、例へば

英國なども、堂々たる戰爭で勝つ事が出來ないから、獨逸封鎖を唯一の兵法とした。而して獨逸は之に對する報復として、英國の經濟生活の中心點を破壞せんが爲めに空擊を始めた。白人の眼から見れば、軍事目的を成就せしむる爲には、如何なる行爲も不法ではなく、如何なる犯罪も野蠻では無い。表裏反覆と慘忍酷薄とは、白人の專有物である。彼等は口に正義人道を唱へる。然れども言行不一致は白人の最も長所で、有色人種の到底及ばざる所である。例へば、彼等は口に理想主義を說き、人類救濟の理想的使命を云々するが、其行ふ處を見れば、一九〇三年より十年間に、獨逸の遠征軍が植民地に於ける無辜の土人を殺戮せる數は、實に驚くべきもので、植民大臣の承認せる者だけで、既に十萬五千人に達し居る。獨逸一國にして既に此多數である。歐米の白人全體に就いて積分したならば、毎年之位は有る乎も知れん。動物愛護會を設ける程の慈愛心が、眞に彼等にあるならば、犬や馬を愛する前に、先づ人類を愛すべきでは有りません乎。」

五九頁「西洋人が動物を愛する目的は外にあるのです。日本では洋妾をラシヤメンと云ふでせう。ラシヤメンはラシヤの材料を供給する緬羊の事で、西洋の男子は此ラシヤメンを相手に彼等の獸慾を滿足せしめ、女子は同樣の理由で犬を愛するのです。其ラシヤメンの代りになるから洋妾をラシヤメンと云ふので、米國で黑人が犬の代理を務める事があれば、白人の男子が嫉妬心から之を私刑に處するに過ぎません。彼等の行ふ事は犬猫のする事と大差がないのです。夫ですから、ウキルソンでも、是等は理窟では行かず、感情問題であると自白して居るのです。其感情を抑へる丈に、彼等の理性が發達して居ないのです。」

動植物園を見てパゴタ公園に中食し、宮殿を拜觀し工學專門學校に行つた。研究設備などは別に珍しくもないが、今回の騷動に鮮人が配布せる檄文を見た。中央に韓國旗を交叉し、右に一鮮人の像を畫き、上下左右に日鮮兩文にて、大韓帝國獨立萬世萬萬世と乎、孝悌梨花洞忠信洞などの文字が書かれてある。

二十四番「韓國の國旗は、丸で八卦師の看板の樣ですね。」

二十一番「支那と露西亞と日本とあるから、どつちに附いたら良いかと、李朝時代には毎日占つて居たのさ。」

二番「此卦はどう云ふ意味なんです乎。」

五九郎「上にあるのが三本共に中央が切れてあるから地で、下のが天です。」

十七番「地が上になつて、天が下になる樣では、逆さですから、韓國が轉覆するのも當然ではありません乎。」

五九郎「易法ではさうでありません。地天は泰と言つて、下の者が上に行き、上の者が下に居れば「意思の疎通が出來るから、天下は泰平であると說明してあります。それから、右にあるのは眞中の一本が切れて居るから、離之卦卽ち火で、左のは、其反對で坎卽ち水です。」

十七番「丸て、韓國民が水火の苦みに逢ふと言ふ前兆が、其國旗に顯はれて居るのですね。」

五九郎「天と地と水と火とは人類の生活に缺くべからざるものであるから、韓國の國家も亦、其國民に缺くべからざるものであると云ふ意味でありませう。」

三太郎「凡て世の中の事は、人間の考次第で何とでも註解が附きます。同一の事實が吉兆であるとも見られ、或は凶事の起る前兆とも判斷されます。迷信が盡きないのは其爲で、例へば、日淸戰爭の頃に、支那の國旗は元來龍を畫いたのであつたが日本を征服する積りで、更に龍の口先に旭日を加へて、龍が旭を呑む形にした。我々から見れば、其說明が逆になりまして、是まで龍の領分であつた旗の一部を、旭日に割讓したのであるから、滿洲や山東省に日章旗が建てらるゝ前兆であつたと言ふ事も出來ますから、支那が勝つても、日本が勝つても國旗に旭日を附けた意味が通ります。つまり當りが有つてはづれがない事です。」

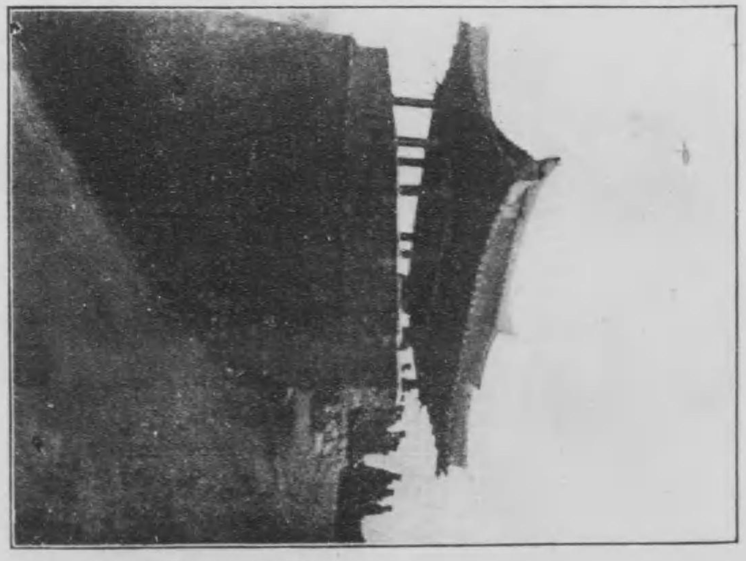
四番「今後朝鮮をどうしたら良いの乎ね。」

五九郎「夫は簡單に解決が付くさ。今內地では勞働者不足で困難して居るから、第一に朝鮮の男子十五歲以上を內地に移住せしめる。第二には朝鮮に於ける憲兵は勿論、鐵道員でも郵便局員でも、凡て內地の壯丁を使用し、且つ赴任の際細君同伴を禁ずるさ。左樣すれば內地にも朝鮮にも一代雜種二代雜種と云ふ風に、自然的配合が出來て、理想的に人種平等主義が實現される事でせう。」

翌日は午前六時に起床して、市內を見物し、仁川港に出掛けた。山上高く見えるのは測候所で、山上から眺望した所に依ると、大小の島嶼は外港を抱擁し、港內廣濶にして風波高からず、水深きに似たるも、潮汐の差は世界有數のものにて、最大三十三尺に達せるが故に、大船は陸岸に近づく事能はず、遠く三海里の沖に於て荷役を成さざるべからず。又干潮時に際しては、海岸一帶干潟となるが故に　小船と雖も非常な困難を感じたのであつたが、今は閘船渠の築造成り、閘門には二重門扉を設備して、潮位の干滿に拘らず、船渠內は常に二十七尺五寸以上の水位を保つ故に、

第五四圖　（五〇九頁參照）

塔西の外城天水



第五三圖　（五〇三頁參照）

乙密臺（明治二十八年戰役に於て露軍の根據地）

四六時中間斷なく荷役を爲す事が出來ると云ふ技師長の說明てある。仁川倶樂部の樓上に夕食を濟まし、復び京城を經て夜汽車に乘り、平壤に着いたのは午前五時てある。

瑞氣山頂に立ちて四方を望めば、大洞江其東南を流れ、仁南漠々たる平野遙かに連り、牡丹臺とて密臺と其東北を擁し、翠松鬱々として山谷を覆ひ、洵に自然の勝地である。

案内者「是が七星門と言ひます跡て、日淸の役に敵將左寶貴が、義を重んじて國難に殉じた所てあります。」

十三番「あれは何門てす乎。」

案内者「普通門てあります。」

行く事幾何もなくして乙密臺に達した。臺上に四虛亭があり、日淸の役に我が勇士の放てる彈痕今尙歷然として居る。案内者は臺上に地圖を擴げ、四方を望みながら、

苦戰奮鬪の地點を一々指示して、日清及文錄役の史跡を談る事一時間以上に及んだので、到底茲に之を記載する丈の餘白がない。眞面目に聽講して居る者もあれば、折柄降りしきる大風雪に凍えて、早く講話の終らん事を祈つて居る者もある。山を下れば玄武門で、其次に坂を登れば小西行長が惡戰苦鬪せる牡丹臺である。松樹の繁れる中を過ぐる事數町にして箕子廟に詣で、大洞江に沿うて進めば、切り開かれた絶壁の自然石に刻まれた大小官吏に對する表德碑が、數へ切れぬまでに竝んでゐる。

一番「朝鮮には德望のある官吏が多いと見えるね。日本には滅多に見られないがね」

案内者「無理に建てさせる樣なもので、少しもあてになりません。」

五九郎「こんな物が澤山あるのは惡い官吏が澤山居ると云ふ證據なんです。官吏と云ふ者は惡いと相場のきまつて居る所に、稀に良い人があれば賞められるので、多くの官吏が善ければ、稀に惡いやつが罰せられるのです。」

案内者「是が有名な練光亭です。」

三太郎「佳い景色ですね。建物は惜い哉滅茶苦茶になりました。」

十四番「戰爭の際には、かう云ふ立派な所にある掛額や、扉などを平氣で薪の代用にするやつがあるんだからたまりません。」

一番「此所はどう云ふ古跡です乎。」

案内者「小西行長が姓生を口說いて、肘鐵砲を喰つた爲に、切り殺し大洞江にたゝき込んだ遺跡です。」

二十一番「日本で言へば、ふるあめりかに袖は濡らさじと言ふ幕で、朝鮮にもなかなかの女があります。」

案内者「其下の方に、河岸に立つて居る小さな祠は、其女を祀つたものです。」

午後三時平壤を發して再び車中の人となつた。定州驛に入ると停車場は大混雜して居る。驛員の報告に依れば、例の暴徒が起きて、憲兵官舍に押寄せ、鮮人三十餘

名殺されたのであつた。

十三番「主謀者が憲兵官舎に來て、韓國は元の如く獨立したのであるから、日本の御世話を受けぬ故に、立ちのいて呉れと請求し、竟に持つて居た鎌で切り付けんとしたさうです。所が憲兵隊長は有名な擊劍家だから、拔き打ちに其主謀者を袈裟掛に切り、續いて寄せ來る惡徒を頭から竹割とし、返す刀で五六人やつつけたが、どし〳〵押し寄せるので、他の憲兵が發砲して擊退したさうです。」

十四番「始め暴徒が起きた際には、凡て空砲を放ち、或は實彈を込めても態と天に向つて發砲し、成るべく負傷をせずに引取らせる豫定で有つた所が、宣教師が夫を惡用して、信者には日本人の打つ鐵砲が決して當らないと說教したので、無智の鮮人が平氣で押寄せる樣に成つたから、已むを得ず、今では遠慮なしに殺す事にしたさうです。」

五九郎「外國人の宣教師と云ふやつは、仕末にいかんです。いづれ本國へ食ひつめ者が來て居るのであるから、彼等は宗教の名を借りて、目的は外にあるのですからね。先日も教會堂で、亞米利加製の煙草の廣告を盛んにやつた宣教師があるさうです。」

二十五番「酒や煙草を信者に勸めるのです乎。」

五九郎「直接に勸める事は出來んがね、かうです。アヘンを呑む事は禁ぜられて有りますが、之を呑めば非常に愉快になるので罪を犯す事になる。日本製の煙草にはアヘンがないが、大刀碑にはアヘンが少し入れて有ります。皆さん大刀碑は成る丈使用せぬ方が良い、と云ふ說教なんです。大刀碑と云ふのは亞米利加製の煙草の名です。」

二十五番「飲んで惡いと言つたのなら、良いでせう。」

五九郎「君は正直者です。未だ年が若いから、而し人はさうでありません。

廣告も世間憚る墮胎藥（ダイヤク）

飲むなと書いて呑み込ますなり

と言ふ句がありませう。アヘンが入れてあるから呑むなと言へば、アヘンの爲には生命をも惜まない支那人が、之を飲むのは當然でありません乎。其翌日から大刀碑の賣高は三倍に增加したさうです。」

既にして汽車は新義州に入り、幾何もなくして鴨綠江上の長橋に差しかゝたので茲に一行杯を擧げて新領土朝鮮に袂別し、眠に就いた。

四十九　奉天見物

本溪湖驛に下車し、兜山に登れば、明治三十七年遼陽の會戰に一敗地に塗れた敵が、其頽勢を挽回せんとして、歩兵三十三箇大隊、騎兵三十六箇中隊、砲二百門を以て我軍の右翼を攻め、交戰四晝夜遂に我軍の彈藥全く盡き、石塊を投じて頑守せる散兵壕は、今猶昔の儘にて、石塊累々腥風鼻を打つの感がある。山を下り日支合辨に成る煉鐵公司を參觀して、午後再び乘車し、夕方に奉天に着いた。翌朝一行三十名は馬車十臺に分乘して、先づ喇嘛寺西塔を見物し、次に舊市街に向ひ、城壁に登りて市の內外を展望した。城壁は周囲一里半、高さ三丈、厚さは壁上に砲列を布くに足る樣に見受けた。奉天督軍張作霖の兵營がある。觀覽券を得て、先づ淸の大祖高皇帝や大宗文皇帝の宮居せし宮殿を拜觀した。我々に續いて日本の婦人や子供が五六人入り込んで、同じく見物して居る。

五九郎「番兵が銃劍を握つて立つて居る丈は立派だが、出入する人が敬禮もせずに行くのを默許して居るなどは、丸で軍規が行はれて居ないね。」

三太郎「支那兵だから軍規が亂れて居るのは仕方がないとして、苟くも他國の宮殿に出入するのに、番兵に敬禮をせずに行くと云ふ法はあるまい。日本の將校ともある者が是だからこまるよ。軍服ばかりを着けて居ないなら良いがね。是では日支親善などは望まれまい。御互に他を尊敬して、初めて交際が出來るものでありません乎。」

五九郎「自分の國の番兵になら禮をする位知つて居るでせうが、支那兵などに禮をするのは恥と思つた乎も知れんよ。」

三太郎「禮は御互に交換するので、必しも下の者が上の者に對してするばかりではないでせう。乞食の家を訪問したなら、其乞食に禮をするのが何も恥ではあるまい。況んや他國の宮殿に入るのに、其番兵に禮をせんなど云ふのは、畢竟日本の軍人が威張る事丈を得意として居るからでせう。」

五九郎「日本の軍人は他から敬禮を受ける事は知つて居るが、他に敬禮をする事は知らないの乎も知れんさ。何時乎例の通俗講演で有名な中將が、私の田舍の學校に來て講演をしての歸り、途中で其學校の先生が中將に會つても敬禮をしなかつたと言つて、新聞紙上で學校教育を攻擊して居つたが、何も教員だから軍人に途中で敬禮しなければならんと言ふ事もないでない乎ね。殊に夫が其學校の教員であると氣が附いたなら、自分から先に敬禮をしても良いではあるまい乎。彼等の考では、國民は誰でも中將に逢つたら敬禮すべきものだ位に考へて居るの乎も知れんよ。學校教育を彼是云ふ暇で、陸軍大臣になつた序に、自分の配下の將校達に、番兵に敬禮をする事でも教へたら良いではない乎ね。」

三太郎「陸軍中將が小學教員に敬禮をするなど云ふ事は、天地が碎ける以上の一大事でせう。昔からね、手前の豆腐がこげて居るのも知らずに、向ひの店の豆腐を世話燒くと云ふ事があるから、他人の缺點は早く眼に附くものさ。」

五九郎「左樣言へば、我々だつて御互にどんな無禮をして居る乎知れたものでないぞ。兎に角現今の教育家は何と言つた所で駄目だよ。いくら騒いても現實の社會に對して、何等の權威を持たんですからね。」

三太郎「現在の社會に對しては一指を染める事も出來んさ。けれども將來の社會に對しては、教育家に絶對無限の權威があります。つまり軍事を外科的手術であるとすれば、教育は衛生的施設に相當するもので、效果が現れる迄には多大の歳月を

要するから、野蕃人には出來ない仕事です。」

五九郎「將來〳〵と言つても、何時效果が現はれるやら、宗教家の天國や極樂の樣なものでは、當てになりませんからね。」

三太郎「そんな遠い話ではありません。現在の教育家が一定の主義目的で努力すれば、十年後の社會を全然改造する事が出來ます。今日の小學校生徒は十年後の現役兵です。十年後の兵卒に如何なる主義思想を抱かしむる事も、今日の小學校教員の考一つで定まります。現在の陸軍當局者は、デモクラシーが軍隊内部に浸入する事を防ぐ事が出來ても、十年後にデモクラシーの思想を有する壯丁を全部不合格にする事は出來ますまい。今日の中學生は十年後の小壯派で、今日の大學生は十年後に社會の各方面に於て實權を握ります。小學校訓導から大學教授までが一定の主義方針を以て教育すれば、十年後の社會はどんなにでも改造する事が出來ます。而して是が卽教育者の有する特權であります。他の者には集會を禁ずる程な亂暴政府でも學校を閉鎖せざる限り、教育者に對しては如何ともする事が出來ません。」

五九郎「大學はどう乎知らんが、小學校や中學校では、教科書が文部省の檢定を經る必要がある故に、勝手な教育は出來ますまい。」

三太郎「教科書で教育が一定されるものなら、教員などは不必要です。教室に蓄音機を備へて、文部省から廻送して來たレコードを、小使にでもやらせたら濟む筈です。蓄音機を使用せずに、教員を置くのは何の爲だと思ひます。例へば、假に教科書の内に水飴の事が有るとして見給へ、水飴は柔かで甘味があり、滋養分が多いから、老人への土產には良い品ですと說明するも、或は又、水飴は粘着力が强いから、是をステッキの先に附着して、賽錢箱に突き込めば、賽錢を盜み出す事が出來ますと惡い知識を附けるのも、全く教員の考一つで、文部省や内部の當局は、之を如何ともする事は出來ないではありません乎。」

五九郎「不良少年を教員に採用したら、そんな事になりませう。」